

Tangolandia

秋
2011

日本タンゴ・アカデミー会報



—目次—

巻頭言	島崎長次郎	2
わたしのひそかに愛するタンゴ	高場将美	3
蟹江 丈夫さんを悼む	島崎長次郎	7
特集：高橋忠雄氏・没後30周年		
忘れ得ぬタンゴの人々 (その5 高橋忠雄さん) (特集1)	米山 宏・瑛子	9
高橋忠雄先生の思い出 (特集2)	上村 要	12
高橋忠雄先生を偲んで (特集3)	佐々木哲雄	14
思い出のタンゴ喫茶巡り 第4回 川口タンゴ喫茶「エル・ジョロン」	内村 宏	16
50年の回想～私のタンゴ半世紀	山根 洋	19
FMラジオ＝インターネット同時放送による「タンゴ」の発信 (第2回)	丹羽 宏	25
連日のタンゴ三昧	山本雅生	30
エドゥアルド&グローリアの見たタンゴの歴史50年	杉山滋一	32
Pablo Ziegler Meets Tokyo Jazz Tango Ensemble 公演レポート	山本幸洋	35
タンゴ・ダンス世界選手権アジア大会を見て	海部英一郎	38
第2回 東京タンゴ祭2011	杉山滋一	41
「リンコン・デ・タンゴ」レポート	福川靖彦	44
嬉しい石像を発見	山本雅生	50
新・訳詞コーナー 「El sueño del pibe (サッカー少年の夢)」	大澤 寛	51

目まぐるしく展開した今年の前半

島崎 長次郎

時の経つのは早いものです。世界を揺るがせた9.11事件から10年。そして東北大災害発生から6ヶ月以上が過ぎました。脚の遅い台風が通り過ぎる度に、そして余震がある度に、罹災者の方々のご苦勞を思うものです。政治の対応の貧しさをただ嘆いても仕方ありません。前号で節電のための早寝早起きを皆様呼びかけました。この夏の家庭の電力使用量は政府や電力会社の予想を下回りました。国民が力と叡智を結集すれば様々な分野で新しい技術とそれを活かした環境に優しい製品が誕生しつつあります。希望を捨てないようにいたしましょう。

3.11以降にも今年には日本でも多くのタンゴ関連のイベントが行われました。地震の影響も受けました。「コロール・タンゴ」の東京公演の夜の部（地震の当日）や「ブエノス・アイレスのマリア」公演（3月19日）などが中止になりました。そうした中で当初困難視されたEduardoとGloriaの来日が実現し、日本アルゼンチン協会と当アカデミー共催の特別セミナーおよび懇親パーティーを開催することが出来ました*。東京タンゴ祭第2回は



会場を渋谷に移して開催され*、第8回タンゴダンス世界選手権アジア大会も昨年続き横浜・大塚橋ホールで行われました*。他にもPablo Zieglerが日本の若手演奏家と組んだタンゴとジャズとのフュージョンという新鮮な試みも見事に披露されました*。そして、10月9日（日）

には、“踊るもよし”“聴くもよし”を基調とし在日アルゼンチン共和国大使館および（株）ラティーナの後援で、ミロンガ・パーティーが原宿・茶々苑で開催されました。

悲しいお知らせもあります。蟹江丈夫氏（元当会役員）が亡くなられました（追悼文は別項）。タンゴの貴重な生き証人・昭和タンゴの語り部を失いました。

タンゴを愛する皆様のご健勝と東北大災害の復興の早からんことを祈念申し上げます。

（*印は関連記事・報告を本号に掲載）



わたしのひそかに愛するタンゴ

明日は船出 **Mañana zarpa un barco**



高場 将美



この曲は超有名曲ではないけれど、作詞者・作曲者ともに、タンゴでは最高クラスの有名な人だ。だから曲も「ひそかに」という以上に広く存在を知られている。ただし、うれしいことに、あまり多くの歌手がとりあげていないので、曲の魅力がすり減っていない。いつ聴いても、わたしは新鮮な感動をおぼえる。

曲は作者たちの魂がつくったものだが、できてしまうと、曲もまた別の魂をもった生きものになり、ひとり立ちして歩いていく。そして曲の歩む道で、聴く人やうたう人の気持ちが入りこんできて、別の性格というか、別の姿というか、とにかく曲も変わっていくのである。多数の他人が手を加えてきた『ラ・クンパルシータ』さんの変身ぶり、ご発展のすがたはすばらしい。でも、歌曲は、あんまりたくさんの歌手がとりあげると、その中には、曲の良さを表現できない、逆につまらなくする人も多いわけで（「詩＝ことば」の感性の不足が原因だと思う）、曲はだんだん醜くなっていく。表面的な、内容の薄い表現のほうが、商品価値は高いこともあるようで、それはそれで良いことなのだろう。もう「わたし」の考える問題ではありません。

さて、わが愛する『マニャーナ・サルパ・ウン・バルコ **Mañana zarpa un barco**』は、日本でのレコード発売は稀だが「明日は船出」という題になっている。スペイン語の題は、歌詞の詩句をそのまま流用して、「明日は海原に出て行く、1隻の船が」という意味だ。“zarpa”というのは「(船が) 錨(いかり)を上げる」という意味が語源にある。錨がないので、「どこへ行くのかわからない」というニュアンスが含まれる。タンゴ楽団が、「なんにも考えずに、とにかく突っ走って演奏する」ときにも使われることばである。

この曲は、わたしが初めてブエノスアイレスに着いたとき、初めて聴いたタンゴだった。だから感激もひとしお大きい。

たぶん1970年だったと思う。わたしは『中南米音楽』社長、中西義郎(なかにし・よしお)さんのお供で、初めてブエノスアイレスに行った。羽田空港からヴァンクーバー経由で20数時間の長旅(1週間ぐらいかかった気分だった)の末に、ブエノスアイレスに着き、ホテルに入って、シャワーを浴びてボヤ〜んとしていたら、早くも正装(?)した中西さんがわたしの部屋に来て、「さあタンゴを聴きに行こう」とニコニコして、恋人に会いに行くようにソワソワしている。わたしはあきれたけれど、うれしくて、すぐ後ろについていった。正装も略装も同じだから、支度は簡単だ。

タクシーで《エル・ビエホ・アルマセーン El Viejo Almacén》に行った。週末だったので、いっぱい入れなかった。1回のショーが終わると帰る人がいるから(入替え制ではなかったが)外で待っていてくれということらしかった。入り口は小さく、立派な木の扉で守られている。わたしは中西さんの通訳なのだが、ほとんどの場合、中西さんは自分で片言のスペイン語で交渉する。そのほうが、話を通じるのである。早くタンゴを聴きたい中西さんは、タンゴ界では「顔」なので、立ち見でいいから、とにかく、いま中に入れてくれと言ったらしい。わたしは、長く飛行機に乗ってきたせいとか感覚がぼやけていて、よく聞こえなかった。

やっと入ったら、超満員で、中西さんみたいなわがままなお客がぎっしりと客席後部に詰まっていて、ラッシュアワーの国電みたいだった。やっとのことで、人々の頭の間隙から歌手の顔が見える場所を見つけて、まわりから押されながら立っていた。

すばらしい歌手がうたいはじめた!

「うまいねえ、誰だろう?」と、わたしよりずっと現地の状況を知っている中西さんが聞いてきたが(誰が出演しているか知らずに、とにかくこの店に来たのである)、わたしにわかるわけではない。途中から入ったので司会も聞いていなかった。客席は熱狂的で、極度の興奮状態だった。立ち見の場所は雑音だらけだし、曲の前に歌手がなにかしゃべったのも、声援で聞き取れなかった。

「こんなすごい歌手は、ルフィーノじゃないですか、もしかしたら」と、わたしは言った。レコード(少しだが)で聴いたことがあるのとは、声の色やうたいかたが違っていた



●青年時代の
ロベルト・ルフィーノ

が、これだけの存在感のある人はそういない。あとでわかったが、やはりロベルト・ルフィーノ Roberto Rufino (1922-99) だった。

「いい曲だねえ! 何という題?」と、また中西さんが聞いたが、わたしにはわからなかった。わたしは専門誌の編集をしていたから『明日は船出』という曲があるというくらいは知っていたが(耳にしたこともあったかもしれないが)……。

そのうちに、「なんとすてきにダンスができることだろう、固い地面の上では!」という歌詞が、はっきりと聞こえてきたとき、わたしは「あっ、この曲は、いま、このぼくのためにつくられていたのだ!」と感じて、全身がふるえた。わたしはこの歌詞に、ほんとうに運命的な出会いを感じた。おおげさすぎるが、実感だった。

長いあいだ飛行機に乗って、ブエノスアイレスについて、ずっと横になることもなく、タンゴの店にたどりついて、でも立っている感覚はなく、宙に浮いている気分がつづいている。この歌詞を聴いたとたんに、固い地面の上にいるしあわせ、初めてブエノスアイレスの街に立っているうれしさが、こみあげてきて、わたしはこの曲と合体しているのを感じた。

これは第2部（同じ歌詞で繰り返される部分）の歌詞である。



Qué bien se baila sobre la tierra firme.
Mañana al alba tenemos que zarpar.

.....

Diré tu nombre cuando me encuentre lejos.
Tendré el recuerdo para contarle al mar.
La noche es larga, no quiero que estés triste.
Muchacha, vamos . . . no sé por qué llorás.

（なんとすてきにダンスができることだろう、固い地面の上では！ 明日 朝の光がさすと わたしたちは海に出て行かなければならない。……（中略）……

わたしは 遠くにいったときに あなたの名前を口に出すだろう。海に語るための思い出をもつだろう。夜は長い。わたしは、あなたが悲しそうなのはいやだ。お嬢さん、さあ行こう……わたしには、あなたがなぜ泣くのかわからない。）

この曲の作詞者は、オメーロ・マンシ **Homero Manzi (1907 - 51)** である。1942年に発表された。このすぐ前に、彼は**サダイク**（SADAIC＝アルゼンチン作詞作曲家協会）の役員として、メキシコでの国際会議に出席し、その出張を利用して、ラテンアメリカ各地を周遊（？）してきたようである。（帰途に立ち寄ったブラジルのサンパウロのナイトクラブでタンゴを歌う女性歌手を聴いて、その場で『マレーナ **Malena**』の歌詞を書いた）

彼なりに、船乗りの心を実感したらしく、それが『明日は船出』にも表現されている。この曲のはじまりは――



Riberas que no cambian tocamos al anclar.
Cien puertos nos regalan la música del mar.
Muchachas de ojos tristes nos vienen a esperar
y el gusto de las copas parece siempre igual.
Tan sólo aquí en tu puerto se alegra el corazón,
Riachuelo donde sangra la voz del bandoneón.
Bailemos hasta el eco del último compás,
mañana zarpa un barco, tal vez no vuelva más.

（変わりばえのしない岸辺に わたしたちは 錨を下ろして 行き当たる。百の港港が

わたしたちに海の音楽をプレゼントしてくれる。悲しい目のお嬢さんたちが わたしたちを迎えに来る。そしてグラスの味は いつでも同じに感じられる。

ただここ、おまえの港でだけ 心がたのしむ。バンドネオンの声が血を流すリアチュエロ川。踊ろう、最後の小節のこだまが消えるまで。明日は海に出て行く、1隻の船が。たぶん、もう帰ってこないかも)



●作詞者オメーロ・マンシ



●作曲者ルシオ・デマーレ

作曲者は、この歌詞にふさわしく、長いヨーロッパ巡演の経歴をもつピアニスト、『マレーナ』にも作曲したルシオ・デマーレ **Lucio Demare (1906 - 74)** で、当時はすてきなオルケスタ・ティピカをひきいていた。

第1部はマイナー（短調）で、起伏のないメロディにモダンなハーモニーの流れで語っていく。一転して第2部は、メジャー（長調）で、ダンスのよろこびが湧き上がる、みごとな作曲術だ。歌謡曲づくりのお手本といえる曲である。

初演は、デマーレ楽団で、歌手はフワン・カルロス・ミランダ **Juan Carlos Miranda (1917 - 99)** だった。録音は、1942年7月20日とのこと。

当時は、2ヶ月に1曲以上のペースで、すばらしい新曲が次々と出てくる、ぜいたくすぎる時代だったが、この曲も評判がよく、ほとんど同時にカルロス・ディサルリ **Carlos Di Sarli (1903 - 60)** の楽団が、ロベルト・ルフィーノの歌で取り上げ、録音もした。ルフィーノは、活動に波がありすぎるようなアーティストだったが、その後も機会あるごとにこの曲をうたっていたようで、ソロ歌手としての録音もある。

わたしが《エル・ビエホ・アルマセーン》で聴いたときは、かなり長い沈黙期間をすごした後、カムバックした1時期だったらしい。

「ルフィーノがまたうたえるようになった」とみんな喜んでいたが、活動状態はデタラメで、わたしが聴けたのは幸運以外のなにものでもなかったようだ。その夜も第2部には出てこなかったし、後日その店に行っても、彼はいなかった。「頭がおかしいのだから仕方がない」と、ファンは彼に怒るところか、病人としてあわれみ、それでも愛していた。わたしは魔王のような人（悪魔も天使の一種ですよ）を3分間聴いた一期一会を、いつまでも忘れない。

* インターネットをお使いの方は、デマーレ楽団＝ミランダ歌のこの曲が、http://www.todotango.com/Spanish/las_obras/Grabacion.aspx?id=1734&player=wmp で聴くことができます。ディサルリ楽団＝ルフィーノ歌は、<http://www.youtube.com/watch?v=X5jkL5g1Bug&feature=colike>（静止画像です）

蟹江丈夫さんを悼む

島崎 長次郎

蟹江丈夫さんが、去る9月8日未明に入院先の病院で亡くなった。かねて体調を崩されていたことは承知をしていたが、その後入院し、しかもそんなに急変するほどの容態だったとはまったく気づかずにただけに、なんともやるせなく、悲しく、残念でならない。

わが国のタンゴ界の中で、この道の先駆者だった高橋忠雄さん、高山正彦さんに続いて蟹江さんほど早くからその名を知られた人はいない。私が蟹江さんの存在を知ったのは、昭和27（1952）年5月5日に創刊された「中南米音楽」（現在の「ラティーナ」）誌上だった。後にわかったことだが、彼はこのとき19才の学生（早大）だった。同誌に「私の好きなロベルト・フィルボ4重奏団のレコード」を堂々と執筆し、引き続き2号には惚れ込んだ「ロドリゲス・ペーニャ」について“この名曲をこの位素晴らしく演奏したものは先ずあるまい”と熱筆をふるっていた。これを皮切りに、その後も同誌でディスク評などを担当する一方、東芝レコードその他で多くのライナーノーツを手がけられたのは周知のとおりだ。残された氏の業績でとくに凄いのは、なんとといっても「タンゴ・エン・ハポン」など、日本のタンゴ楽団に関する諸々の記述であろう。記憶力抜群でそれぞれのメンバーから、楽団の裏事情、エピソードまで、こまめに足で集めた情報は貴重この上もなく、今後に伝えられるべき内容になっている。現にTANGUEANDO en JAPONに連載中の「日本のタンゴ楽団」は、その集大成とも言える好著で、永遠の保存版として大切にすべき価値を有している。

“評論はするが楽器は弾かない”、という傾向の強いタンゴ愛好家の中で、蟹江さんは、ピアノをよくし、自らを中心にバンドネオンやバイオリンなどと組んでリバダビア楽団とか、ロドリゲス・タンゴ・トリオといったコンフントで「菅平のコンサート」などでその腕前を披露されたのをご存知の方も多しことだろう。そして、レパートリーにはタンゴに加え、いつもお得意のパソドブレの「グラナダの栄光」や「グラシア・エスパニョーラ」



が取り上げられるのが常だった。そういえば氏は俗に“B面魔”といわれ、SPのB（裏）面にあるパソドブレとかランチェラなどをことさらに好むことで有名だった。あるとき高山正彦さんが笑いながら“蟹江君、もしレコードが剥がせるなら剥がして君にあげたいものがいっぱいある”といったことがある。私もこれにヒントをえて、カラベリなどのパソドブレを持って行ってはタンゴと交換し、ほくそ笑んで帰ってきたことが何度かあった。

蟹江さんの好みはドナートとかデ・アンジェリスといった気風のよい楽団で、どちらかというトリズミックで明るいトーンのものがお好きだった。そしてカナロは20年代より、30年代のラッパが頻繁に顔を出すような時期のミロンガが特にお好きだった。

氏はまたダジャレの名人で、いつも人々を笑わせ、周囲に明るい花を咲かせてくれた。やや物足りない演奏が終わると、とたんに“日光の手前だねえ”??、“イマイチ（今市）です”、といった具合で、どっと笑いを取るのが得意だったが、豊富な知識をユーモアたっぷりの口調で語った蟹江節ともいうべき独特のトーク、それももう聞けなくなってしまったのは本当に寂しい。振り返って周囲をみると、かつて「タンゴ4人の会」で、ともに活躍した仲間の石川浩司、大岩祥浩の両氏を一昨年に見失い、そしてここにまた僚友の蟹江丈夫さんを見送らなければならないのは、なんとも残酷だ。が、遺されたものの使命として、命ある限りタンゴの灯をともし続けることを、坦々として実行しようと思う。それがお世話になった蟹江さんたちへの唯一の報恩と思うからだ…。

蟹江丈夫さんのご冥福を心からお祈りし、追悼の言葉としたい。合掌。



左から、石川、大岩、島崎、高野、蟹江。2000年頃
_____ は故人

高橋忠雄氏（1981年2月11日没）の没後30周年を記念して特集を組みました。氏の生前にお親しかった人たちの中から3名の方々にご執筆を頂きました。タンゴ界に残された氏の功績を偲ぶよすがのひとつになればと思います
(編集部)

忘れ得ぬタンゴの人びと…… [その5]

高橋 忠雄さん

★ 米山 宏

☆ 聞き手 米山 瑛子

☆ わが国でタンゴを語るとき、先ず一番先に取り上げなくてはならない方というのと…、どなたになりますか。

★ そうですね。やはり高橋忠雄さんということになるでしょう。タンゴをわが国にいち早く紹介したのは目賀田綱美男爵ですが、広くこれを一般に普及させた点で高橋さんの功績は実に大きかったといえます。もちろんや、後輩の一方の雄、高山正彦さんもその意味で忘れてはならない方ですが…。



☆ 今年は高橋忠雄さんが亡くなられて丁度30年になられたそうですが、少し高橋さんについてお話しを聞かせてくださいませんか。

★ 高橋さんは、父義男の一人っ子として明治45年に生れていますが、このお父さんが偉い方で、明治15年3月創業の「時事新報」(当時、総務には福沢諭吉がいた)に入社し、後に三井呉服店(現在の三越)に移って重役にまでなられる一方、茶人としても「箒庵」の名でこの道では広く知られた方でした。

その息子の忠雄さんは、戦前の昭和12年から13年にかけて、ヨーロッパから南米のアル

ゼンチンにかけて巡遊するという人の羨む大旅行をし、豊富な音楽体験をされましたが、それを基にステージや放送で活躍をされていた昭和24年頃、麹町の一番町に住んでおられました。私はその頃16才の中学生で隣の3番町に住んでいたこともあって、友人の藤崎英文に連れられて時々お宅にお邪魔してレコードを聴かせてもらっていました。当時はラテンやタンゴのファンが激増しているときで、たとえば私のほかに、柴田重利、宗像稔、加藤正彦、加年松城至、蟹江丈夫、川原美和子といった数名がレコードを聴きたいがためによく高橋邸に集まったものです。今振り返るとこれらのグループが、実は昭和27年5月創刊の雑誌「中南米音楽（現「ラティーナ」）の貴重な母体になった、と今あらためて思うと、誠に感慨無量なものがあります。

☆ そうでしたか。物資も乏しい時代に、素人さんが雑誌を作るというのは、さぞ大変だったでしょうが、よく頑張られましたね。何がそのパワーになったのでしょうか。

★ それは魅力ある音楽への憧憬、つまり、すべてが飢餓の状況だった時代から開放されたいという、若者らしい熱い情熱の発露だったといえます。雑誌は当面隔月の発行とし、並行してコンサートも続けるというのが条件でした。会費は月に一人50円で、会の名称は「中南米音楽（SEMI）」としました。もちろん高橋さんの存在は偉大で、当時出演していたNHKの放送で、投書者への通信というかたちによって宣伝したおかげで会員は増加していきました。雑誌の最初は用紙を用意するのなかなか困難な時代でしたが、これは当時加年松氏が勤めていた北越製紙で調達し、印刷は柴田氏の父親の所属していた工場に印刷して昭和27年の5月の端午節句の日に、思いを込めた第1号がとにかく発行できました。ところが2号までは何とか出せたものの、それ以降は費用が調達できず、なんとガリ版刷りになってしまったのです。その間に高橋さんは代々木上原に引越しをされ、今度は皆でそちらに押しかけ、レコードを聴かせてもらったり、ダンスのレッスンをしたりしていましたよ。そういえば当時、東急の五島昇氏もそこにきていましたね。その後に牛込の東亜映画（100人ほど入れる集会所）でレコード・コンサートを行い、銀座の十字屋の加藤正彦氏が中心になって、タンゴの普及の一助にといろいろと高橋さんに質問する役割をされました。その後も運営は紆余屈折があつて潰れかかったことが何度もありましたが、その都度どうにか持ち直し、続けることができました。



高橋忠雄、刃根英子（カンデラリアの経営者）、米山宏
昭和40年頃

☆ 高橋さんは、いろいろと常に新しいものにも興味をもたれる方だったそうですが…。

★ そのとおりでしたね。早くから“これからはレコードに変わってテープの時代が来る”と唱え、私を通して白木屋の6階にあった東京通信機工業（：現在のSONY）に乗り込み、是非ともテープ・レコーダーを作るべきだ、と盛田専務（後の社長）に進言しました。その頃はまだ国産のテープ・レコーダーはなく、ドイツのグルンディヒ製が当時の換算でおよそ5～600万円もしたのです。その後SONYがこれに応え製作したのはご存知のとおりですが、始めは高かったものです。そんなことで高橋さんはアルゼンチンで買ってきたSPレコードを次々に手放すことを始め、コンサート会場は即売会のようになり、大岩さんや私もこれを少しづつ買ったものです。今にして思うと、SPの価値をあまり評価していなかったようにも見受けられますが、どうなのでしょうかね。

☆ 音楽的な素養がおありだったようで、曲や演奏の好みも高山さんなどとは少し違っておられたとお聞きますが…。

★ そう。楽団の指揮をされたり、ステージの演出などもされるので専門的な面が強く、その分レコードで聴く演奏の評価もシビアな面がありましたね。たとえばフレセドのような斬新な演奏には興味をしめし、どちらかというカナロのような型にはまったものには評価が厳しいとか。作品でもそうで、斬新で音楽性に富むものにはいつも興味をもたれていましたね。「ビダ・ミーア」とか「アディオス・パンパ・ミア」、 「プレゴネーラ」とかピアソラの作品などといったように…。その頃の高珠恵楽団とか、渡辺はま子楽団なども高橋さんの助言が絡んでいた可能性があるかもしれませんね。ティピカ東京のメンバー絡みで…。そういえば奥さんは大変きれいな方でしたが、日劇のダンシング・チームで踊っておられた方で、なんでも仲人は有名な小林一三さんのことでした。

☆ 晩年は音楽そのものから離れ、ご商売をなにかおやりだったとかお聞きますが…。

★ ひとつは銀座のコアビルの中にあった和菓子の「菊廼舎」で喫茶の部をまかされ、お好きだったコーヒーに執着したお仕事をされていたようですが、その後は神田の神保町に「パナンピ」という喫茶店をだされ、コーヒーを真剣に入れておられたようです。

晩年は奥様にも先立たれ、寂しかったでしょうが、外国旅行もされたり、店を開いて多くの知人や友人とも交流ができてよかったのではないのでしょうか。それにつけても、わが国にラテン音楽の夜明けを告げ、タンゴを中心に多くの研究家や愛好家を育みつつ、広くその普及に尽くされた功績は計り知れないほどに大きいといわなくてはなりません。あらためてここに深甚なる感謝を申しあげ、心からのご冥福をお祈りしたいと思います。

（文責：島崎）



高橋忠雄先生の思い出

お人柄を含め、多くを学ばさせて頂きました



上村 要 (函館市)

ここに私が大切にしている一冊のアルバムがあります。このアルバムには高橋忠雄先生と交わした多くの手紙や写真が保存されております。先生が亡くなられたのは1981 (S.56)年2月11日腎不全のためとあり、後日喪主の長女 林 美恵 (ハヤシ ヨシエ) さんからのお便りによれば亡くなったのは吐血して倒れてから三日目でしたとのことでした。享年69歳。高橋忠雄氏は戦後の1946年頃から、NHKのラジオ放送で「ポルテナヤ音楽の時間」「ラテン・アメリカ音楽の時間」を担当され27年間続いたそうで正に驚異的な記録と言っているでしょう。多くの人がそうしたように僕もこの時間をノートに記録し、多くを学びました。

またフジTV-UHV「スター千一夜」の初代司会者でもあり、明快な発音と話術で当時の人気スターでもありました。ご存知、ケーシー高峰さんも先生に憧れたそうです。1978年8月21～22日、地元の石橋・大野両氏の協力を得て高橋先生を函館に招待することになりました。函館市内の有名観光地や大沼公園等を案内しました。大沼公園の時は生憎の雨でしたが、私が残念がりましたら“いや、お天気ときは珍しくないんですよ、この雨が貴重なんです”と、おっしゃって下さりホッとしましたが、この辺りに先生のお人柄を伺わせるものがあります。

このときに、ひとつ大失敗をしました。先生から^{こぶし}拳大のコーヒー袋を頂いたのですが、これがなんと「モンテ・アスール」つまり「ブルー・マウンテン」だったのですが、こちらは呑兵衛、コーヒーには興味がなかったとはいえ、ホテルでの不味いコーヒーではなく、この「モンテ・アスール」をなぜ提供しなかったかと今でも悔やんでおります。コーヒーの好きな友人は大喜びでしたが、、、

先生とは何度かお会いしておりまして、先生が食通であることは有名なのですが、ホテルでの歓談中“紅茶が好きだ”といいましたら色々紅茶のことを教えて頂きました。“上村さん、蕎麦屋のカレー南蛮というのはネギの切り方に南蛮切りというのがあるそうです”とのご高説、いやはや驚きました。

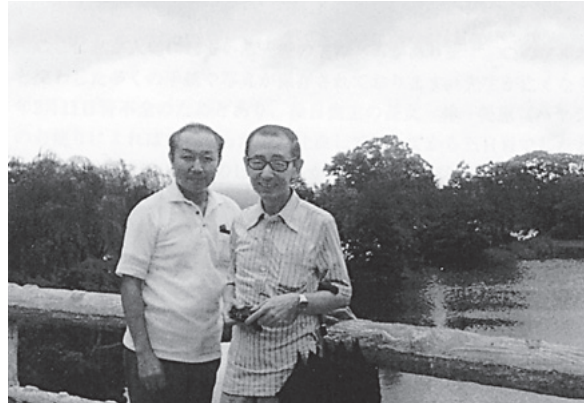
私もアツカマシイとは思ったのですがひとつ質問してみました。先生のお答えは“タンゴを評論しようと思ったらタンゴだけ聴いて居たんではいけません。僕も東京へ帰ったらロックのコンサートへ行く予定です”と。この言葉はその後の私の生き方に大きな影響を与えてくれました。

次に掲載する写真はそのときのもので函館へお出での方ならご存知でしょう。

今度は先生からの直筆手紙二通をご紹介します。1971年12月の書簡でコーヒー好き

の先生の夢がかなったときの嬉しさに満ちたものです。

くごぶさたしました。御地はもう寒いでしょう。この前一寸申し上げましたが僕の長年の夢が実現しました。しかも日本の場所、銀座のと真ん中です。(地図が書かれています) 銀座の四丁目の角にサッポロビルのビルがあります。その新橋よりの隣に今度新しい白い十階建てのビルができました。正しくはインペリアルビル、通称銀座コアビルといいます。この二階に菊



大沼公園にて

廼舎(キクノヤ)という和菓子屋があり、そこでコーヒーと紅茶を売ることになり、その部分を僕が一任されました。大人が商談に使うような店です。まともにいったら億に近い金を積みねばならない所へ0に近い条件でもぐりこみました。菊廼舎の主人は僕のアイデアを買ってくれたのです。どうせやるなら日本の所々と思っていた夢が現実のものになりました。11月3日のオープン、一ヶ月経ち苦労もしましたが本当にやりがいがあります>以下略。

次に紹介するのは、これは先生からの最後の書簡で1980(S.55)年6月11日付、パリー帰り直後のものでエッフェル塔をバックに先生のお写真も添えられていますが、不鮮明のためご掲載しませんでした。1974年4月号から1979年4月号まで月刊誌「中南米音楽」に掲載された先生ご執筆の「私のカミニート」にも紹介されておりますが、今回訪問のパリーの様子が書かれております。

く御無沙汰しました お変わりありませんか。函館でタンゴの会があったことは小澤さんから聞きましたが貴兄が関係して居られるとは知りませんでした。日本の音楽家もうまくなりました。わたしはこの4月5月にかけてパリーに行って来ました。昔の想ひ出に浸りたかったからですが、シャンゼリゼーやフォーブルサントノレ、プラス デ ラ マドレーンのあたりは大分変わりましたが、私の4ヶ月居たアパートはそのままです涙が出るほどなつかしい気持ちになりました。

シャンゼリゼーの大通りにソニーやセイコーが堂々と店を持っています。でもパリー最高の鴨料理トゥール ダルジャンはそのままです。昼食をしましたが、大体日本円で一人前二万円というところ。今ディオール カルダン あたりのネクタイが一本175フラン(1フラン60円位)前後ですが、私が昔買ったヒルデイツジ&ケイという英国の店へ行ったら220フランでした。でも自分の店をよく43年間も覚えていてくれたとって色々サービスしてくれました。こんな所がヨーロッパの古い店のよいところですね。では又 皆様によろしく。6月11日 港区西麻布4-1-14-305
高橋忠雄 上村 要 様>

お亡くなりになられたのが1981(S.56)年の2月11日ということですが、この手紙を書かれた日から丁度8ヶ月目ということになります。文字通り、何通か頂いた高橋先生のお手紙の最後になるもので、今も大切に保存し、残された数々のご功績に深甚なる敬意を表すると共に、あらためて先生のご冥福を心よりお祈りいたします。



高橋忠雄先生を偲んで

佐々木 哲雄 (小平市)

私はラジオ放送で知った高橋先生のお話とレコードを聴きたくて、しきりにあちこちに出かけた。まだ高校生だった昭和27 (1952) 年、新宿のタンゴ喫茶「マリモ」でのコンサートをはじめにし、その後は、代々木の文化会館や虎ノ門ホールでの中南米音楽研究会 (SEMI)、改造前のヤマハ・ホールでのLPコンサートなど、また少し後の東京駅八重洲口にあったナショナル・ステレオホールなどと多彩だった。とくにステレオホールでは新しいものの好みの先生にびたりで、当時の最新の装置を使って、新着のLPでラテンとタンゴの魅力をたっぷりと聴かせてもらい、いつも50名くらいの人々が興奮の面持ちで帰途につくのが常だったが、そのうち私たち5～6名は、近くの喫茶店で高橋先生を囲みいろいろなお話を聞かせてもらうようになった。いわく、得意なカメラのお話、おいしい食べ物の話、得意のコーヒーや紅茶の話など、豊富な知識でどれもこれもとにかく面白くて惹きつけられたものだった。やがてその延長戦のようにして、小田急線の経堂のお宅に押しかけるようになった。メンバーは故人となった佐藤靖 (当時のポルテニャ音楽同好会上野支部長) を筆頭に、小林弘二 (当会員)、それに私などが毎月のようにお邪魔し、いつも夜遅くまで楽しませてもらったが、奥様はさぞご迷惑なことだったと、いまは恥じるばかりだ。

或るときのこと、台風のために先生宅の台所の流し台が壊れ、難儀をしていることを知り、大きなハンダごてを持参して修理を試みたが、土台が木製のためにうまくいかず、期待をうらぎってしまったことがある。今思うと、あの頃今日のような接着剤があったら即座に解決したのになあ、と悔やまれてならない。

昭和50年頃になって今度は麻布の広尾のマンションに引越しをされたが、メンバーは相変わらず毎月のように先生宅に押しかけて楽しませてもらった。

しばらくすると、先生が言うのだ。“今度銀座で念願のコーヒーの店をやることになった”と…。たしかにこの道では玄人で、或る雑誌にコーヒー通として取り上げられたこともあるくらいだったが、率直に言って、商売となると大変なのじゃないのかと心配でもあった。場所はライオン・ビルの隣のコア・ビルの2階、甘味処「菊廼舎 (きくのや)」の一部を任された模様だった。銀座だからということもあって、とにかく食材には凝って食パンは帝国ホテルの〇〇とか、バターは小岩井、コーヒーはモンテアスール～？えっ、と尋ねると、これが有名なブルーマウンティンだとわかって大笑いだった。しかし、ここは一年くらいで撤退されてしまった。

この後にコーヒーの店を持ったのが、神田神保町の三省堂の近く。「パンンピ」という店だった。そこは中古レコードの富士レコード店の所有するものだったとか。今から4～5年前、三省堂別館（自遊時間）で行われた島崎会長のSPコンサートの折に、主催者の富士レコードの井東社長にこの点を尋ねると、“そのとおりで、高橋さんが是非にというので利用していただいた”、とっておられた。店名のパンンピは、ラテン音楽の曲名の「パンンピペア」から取ったのだそうで、蝶々の意味だとおっしゃっていた。店のカーテンは奥さんの見立てとか、食材は相変わらずのこだわりを見せ、どことなく高橋先生の趣味の漂った店だった。昔からの知人や友人も訪れたことであろうし、成功だったかどうかはともかく、先生の念願を叶え、最晩年を飾った場所だったことはたしかだったと思う。そういえば、米山宏さんや、先ごろ亡くなった蟹江丈夫さんなどのもここでお目にかかったことがある。私も出来ることは、と思い、閉店時の後片付けやゴミだしなどもよくしたものだ。先生はそれをととても喜んでくださり、あの柔和なお顔でねぎらいの言葉をかけてくださったのは、何よりうれしく、憧れた高橋先生のお側に少しでもいられた幸せをかみしめた。

高橋先生が亡くなったのは昭和56年2月11日、通夜はご自宅で、告別式はそのマンションの前で執り行われ、早川真平さんをはじめ、藤沢嵐子ほか、中南米音楽の中西義郎さん、蟹江丈夫さんなども見え、地味ではあったが往時を偲ぶよいお別れの会だった。

墓地は文京区の名刹とされる護国寺にあり、正面の位置に整然ともうけられている。さらにその脇にある小さな釣鐘堂と茶室は、お父様がかつて寄贈されたものだという。

私も折に触れお参りをさせてもらっているが、わが国にタンゴを含めたラテン音楽を広めた功績は大きく、放送やステージ、数多のレコードの解説、それに各地の愛好家の集いでのトークなど、どれだけファンを啓蒙し、教育してくれたかはかりしれないと改めて思う。

没後30周年にあたり、感謝を込めて思いつくまま思い出を述べさせていただいた。



’80年11月3日 銀座・ラ・ポーラにて



文京区 護国寺

撮影：筆者

思い出のタンゴ喫茶巡り(第4回)



川口タンゴ喫茶「エル・ジョロン」

～店主、日向信吾氏との出会い～

内村 宏 (さいたま市)

東京都心部から埼玉県大宮に向うJR京浜東北線にて県境の荒川を超え、二つ目の西川口駅から徒歩五分の駅前にあつたタンゴ喫茶店「エル・ジョロン」、夢のように熱く燃えたあの頃からもう何年過ぎたのだろうか。久しぶりにふり返ってみよう。

ログハウス風、また山小屋風とも取れる作りの建物、店主「日向信吾」氏が経営を始め、一年程過ぎた頃に初めて訪れたのでした。入口の扉を開け店内を見渡すと、右側にゆっくりと揺れるロッキング・チェア、そしてカウンター、奥に二つ三つの空席を残しほぼ塞がった座席、若く学生と思える客相、当然ながらタンゴが流れパイプを銜えた店主が、“の”の字を書きながらコーヒーを入れる。こうして入れると酸化せず味の良いコーヒーが入るといふ。飲んで見ると中々の味。それまでコーヒーにあまり興味が無かったが、度々の訪問でコーヒー党の仲間入り、今でもコーヒーを愛飲している。

店主の日向氏は九州で育ち、大学は東京でと単身上京、苦学し卒業したと聞く。学生の頃、アルバイト先の喫茶店でコーヒーの入れ方を習得、卒業後高校の数学教員を十数年経て退職、タンゴ喫茶を開店、店の作りも自身の手作りと言っていた。

この頃の若い客の殆どがタンゴを知らず、もっぱら友達との会話に専念で、タンゴに興味を示す若者はあまり見掛けられなかった。流れるタンゴは店主がタンゴに浸っていたいとの思いから流しているので、リクエストも受付けていませんと当時は言っていた。たまに、トビ職風の客が来店し、こちらの「El Llorón」は誰の演奏かと尋ねることも在ったと聞いている。とにかくこの頃の「エル・ジョロン」はまだまだ隠れた存在の喫茶店でした。

～タンゴ・ファンのオアシスとして～

「エル・ジョロン」が、多くのタンゴ・ファンに知られるように成りだしたのが、開店後凡そ一年半程経過してからでしょうか。最初に訪れたタンゴ愛好家は水曜会の湯沢会長、プロの演奏家ではヴァイオリンとギターの河内敏昭さんと記憶しています。当然ながら多くのタンゴ・ファンが訪れ、次第に若く学生風の一般客は姿を消してゆき、代わりにタンゴ・ファンが集まるようになりました。ロッキング・チェアでパイプを銜え、タンゴに耳を傾けながら、タンゴ談議に興じる熱烈なファンの集まる場所へと変わって行ったのでした。タンゴ好きな常連客の中から自然とタンゴのクラブを作ろうよと誰彼となく持ち上がり、出来たのが「川口タンゴクラブ」でした。例会を行いながら地域で会員（タンゴ

愛好家)を増やすため、タンゴの研究者や演奏家をゲストに招き、一步一步例会活動を重ねて行く中、時々訪れていたピアノ奏者で以前タンゴ楽団を指揮していた相馬昭三氏(Orq. Organito)を中心に楽団「Orq. El Llorón」を結成、演奏会も度々行い、地域の人達から感謝と励ましの言葉を戴き、新たな演奏会の糧とタンゴの普及に会長の日向氏を始めスタッフ一同頑張ったのでした。

喫茶店での「Orq. El Llorón」の練習日には店内に入りきれない客が、入口の扉越しに練習演奏を覗き見るほどの盛況で、店主(日向)の笑顔が今でも思い浮かびます。

また、オール大学タンゴ演奏会、ノーチェ・クバーナのタンゴ演奏会、全日本タンゴ・オールスターズや日・亜合同タンゴ演奏会、歌手では藤沢嵐子、菅原洋一、倍賞千恵子、前田はるみさん等に出演いただき、タンゴ演奏会を年1回開催するのが恒例となり、タンゴ・ファン大勢の方々に参加頂きました。そうした中で、菅原洋一さんの演奏会を川口市市民会館で開催し、当日会場前にダフ屋が登場、タンゴ演奏会でダフ屋が出た話は、未だに当時を知る者の間で語り草となっています。

民音タンゴの全国ツアーで川口演奏会の時は、皆で会場へ聴きに行ったのでした。終了後、出演の楽団を「エル・ジョロン」へ招き、打ち上げパーティーを何度か開催し、その中でバンドネオンのホセ・リベルテラ楽団の打ち上げパーティーの終了後(1978年か)、日向氏と私、(B)リベルテラと(V)アブラモビッチだったと思うの四人がテーブルを挟んで歓談中、突然リベルテラがバンドネオンを弾いてくれる事になり、当然ながらヴァイオリンも加わり、思いがけず目の前で演奏を楽しみました。その演奏はステージで大勢の観客相手に演奏する姿そのもので、大変な感動とその姿勢に心打たれたものでした。今でもタンゴの大切にしたい記憶の一つとして留めています。

これ等と同時進行(1980年頃)で「菅平タンゴ・フェスティバル」が行われた。川口タンゴクラブは音響が担当で、毎年開催日前夜の11時頃、音響機材を積み込んで闇夜を一路菅平へ、日向氏のワゴン車で向かった。到着が深夜の2時か3時近くで、一刻仮眠し、早朝より機材のセッティング、音響の確認が終わる頃になると、列車組第一陣の到着で、すぐさまリハーサル、それからは分刻みのフェスタ本番。北から、南から、各地のタンゴ愛好家の演奏を楽しみ、そして、年一度出逢う懐かしき顔、地方のタ



El Llorón の入り口
柚木秀子、日向信吾、河内敏昭の各氏

ンゴ愛好家との新たな出逢い、この会場で、各地で活躍するタンゴの友人と知り合う。

～タンゴ・ビルに改造して～

店主の日向氏は自身の夢の一つとして、山小屋風喫茶店を、近代的6階建てのタンゴ・ビルに改造し、タンゴのライブ・ハウスを作りたいと言っていた。古い店の解体は雨（梅雨）の来る前にと言っていたが、少しずれ込み解体が始まった。解体の古材を無駄にしたくない、何か方法はないかと何人かに相談するうち、常連客で近くで店を営んでいる仲間が、千葉の御宿海岸に別荘地を購入してあるので、其処に仲間数人で使う別荘を建てることになった。解体の進んだ古材を日向氏と仲間数人で数回御宿まで運び、整地や建築を引き受けてくれた大工の手伝いを行いながら、皆出来上がりの間取りや使い方に心躍らせ楽しんだ。だが洒落にもならないが、途中で大工が地元の女性と駆け落ち、資金も途絶え別荘話は一抹の泡と消えた。

さて、建設の進むタンゴ・ビルは計画通りに進行し、1階に以前と同じくタンゴ喫茶「エル・ジョロン」を、2階は川口音楽文化センター「音楽の館」としてライブ・ハウスをオープンした。タンゴ、ラテン、シャンソン等の生演奏を毎月行い、定着して行くかに当初は見えた。3階から上は一般住宅用、地階にパブ、スナックが入り営業していた。数年間続けたが運営が思わしく行かず、ついにビルを手放し、得られた資金を元手に、プロダクションの設立を計画、実行した。当初は苦しい経営が続いたが、次第に軌道に乗り動き出した所で病に倒れ、入院。良くなり退院、再びプロデュースを続け、これからと言う所で病が再発、再入院。最後に入院先の病院でお別れタンゴ演奏会を自ら企画し、(V)の志賀清さんを始め、プロ演奏家の協力参加で盛大に行われ、入院先の看護婦さん、患者さん、皆が涙でタンゴの演奏を聴いたと言われている。

夢を追い続けた日向氏に出会い、私も幾多の夢を見ることが出来た。この先、タンゴはどんな夢を見せてくれるのだろうか、少しだけ期待しよう。

神保町 タンゴ喫茶劇場

「神保町 タンゴ喫茶劇場」堀ミチヨ著 新宿書房刊 (6月30日第1刷 本体2000円)

タンゴとタンゴ喫茶「ミロンガ」を舞台にした佳い本が出ました。とても甘くなり
そんなテーマの数々を一步手前で品よく踏み止まっているのが絶妙な味わいです。
若い読者は今の自分を振り返り、年配者（もちろん私も）はその昔の己の姿を思い
起こして苦笑いをしながら、そして著者とその仲間が見せる路上生活者との交歓に
胸を打たれながら、明日もまたこの店を訊ねてタンゴを聴きたくなります。(大澤)

50周年の回想～私のタンゴ半世紀

山根 洋（横浜市）

私がおはじめてアルゼンチン・タンゴを意識して聴いたのは、高校3年の時（1952年）でした。人並みに大学受験の準備をしていて、深夜に一息入れようと「5球スーパー・ラジオ」のダイヤルであちこち電波を探していたら飛び込んできたのがアニバル・トロイロでした。もちろん、その時はアニバル・トロイロという人、そしてその人がアルゼンチン・タンゴ界の大御所のひとりであることなど知る由もありません。タンゴについての予備知識など全くないまま、私の脳裏に何か大きなものがとりついたというのが、今思い出してみるとその時の感じでしょう。ラジオ神戸の“クリスマール・アワー”という番組でした。私が当時住んでいたのは、山口県の防府市という小さな町でした。そのころの電波状態で、およそ500キロ離れたところで、ほぼはっきりと受信できたのです。

そして、なんとという皮肉か大学受験の前日に高熱を出してしまい、試験の日は母に付き添ってもらって入学試験だけは受けに行きましたが試験どころではありません…そんなわけで、1年浪人、1年休学して2年遅れで福岡へ。

福岡でやっと待望の「クリスマール・レコード」を先ずは1枚入手、～たしか、レスボンソとウナ・カンシオンだったと思います。伯父の家に下宿していたのですが、その伯父が立派な電蓄を持っていて、それでトロイロのタンゴをしみじみと聴いたのでした。

そして「福岡中南米音楽研究会（SEMI福岡）」に入会。このころ、東芝エンジェル・レコードの拡販のため、高山正彦さんとエンジェル・レコードの中島さんが来福され、これも私のタンゴ熱を高めた要因となりました。



時期的にどちらが先だったか、ほぼ同じころだったと思いますが、早川真平さんとオルケスタ・ティピカ東京も福岡で公演をおこなっています。

ずっと地方で暮らしていた私にとって、このような機会でもない限り生で音楽を聴くこ

とができなかったということが、残念でなりません。

1959年、大学を卒業。最初に就職したのが大阪でした。大阪での一番の思い出はフランシスコ・カナロの公演でした。大阪公演は1961年の年末が押し迫ったころだったでしょうか。～とにかく寒い日でした。このとき、福岡の友人たちが6～7人カナロを聴くために出てきました。福岡では公演がなかったのです。コンサートが終わり、楽屋へ押しかけたことはもちろんでした。そこには、疲れ切った様子のフランシスコ・カナロが椅子に座っていました。感動、感激で、胸が熱くなるのを覚えました。

大阪でも同好会へ入会。熊谷さん、杉本栄男さんがリーダーでした。杉本さんには私が「タンゴ・アカデミー」に入って、八丁堀で会をやっていたころ、その時の会場でばったりお会いし40年ぶりにしばらくお話をすることがありました。大阪の会が2002年11月に創立50周年の記念のCDを作った、と私にも1枚送って頂きました。その後体調を崩されたと伺い、心配しております。

これがいつ頃だったか記憶を辿るために、手元にある古い『Tanguendo en Japón』2001年の第7号を見てみたら、小さな手帳大の紙に石川浩司さんの手書きで「このたびはタンゴ・アカデミーにご入会ありがとうございます。…」というメモが挟まれているのを発見しました。たまたま、読んでいないページに入っていたのでしょうか、その時は気がつかずに、今度初めて見つけた、～何か因縁めいたものを感じました。そのメモに、「第6号は残っていませんが…」と、第5号との2冊が送られてきたのです。つまり、私がアカデミーに入ったのは2001年、ということになります。石川さんの人となりを感じる懐かしい思いでした。

1963年、家庭の事情で福岡に戻り、大阪万博の年（1970年）まで再び福岡で過ごすことに。このころからゆっくりとタンゴを楽しむ、といった状況ではなくなります。この間、SEMI福岡からも離れていました。

1970年に本社に転勤…で、東京での生活が始まります。

東京へ出てはきたものの、まだ精神的なゆとりはなくタンゴとはあまり縁のない時期が続きます。中西さんが恵比寿でやっておられたSEMIのレコ・コンに時々顔を出す程度でした。せめて家でも聴きたいと、『日本フォノグラム』から発売された当時の新録音のLP盤を買い始めました。その一部をリスト・アップしてみますと：

Buenos Aires 8	(SFX-5131) Music Hall
Leopoldo Federico	(SFX-5132, SFX-6023)
	いずれも Music Hall
Atilio Stampone	(SFX-5133) Microfon
Osvaldo Berlingieri	(SFX-5134) Music Hall
Ernesto Baffa	(SFX-5136) Philips など

そのほか、60年代から70年代のアストル・ピアソラのヌエボ・キンテートのものが多数

発売され～「María de Buenos Aires」もこのころ発売されました～、このころから新しいものに興味をひかれるようになりました。

この後およそ20年くらい～90年代ころまでは記憶に残る出来事はほとんどなかったようです。

仕事が営業でしたので、外へ出ることが多く、渋谷や新宿などへ出るとレコード屋を見つけては店に入っていました。そのうちに中西さんの「中南米音楽」へ立ち寄ることが習慣のようになり、～ そのころすでに中西さんはお亡くなりになっており、奥さまと渡部晋也さんが店をやったおられました。渡部さんからいろいろな話を聴きながら、新しいタンゴや新しい音楽家についての知識を得ました。ここでの思い出を一つ…いつものように渡部さんと話をしながらCDを選んでいたら、「この人は将来伸びますよ」と、勧めてくれたのがリディア・ボルダでした。“Entre Sueño”というタイトルのCDでした。タイトルとなっている曲のほか Arrabalero, De Mi Barrio, Apología Tanguera などが入っているCDです。渡部さんの推薦通り、ボルダの歌は格段にうまくなってきた…と私は感じています。

このころから、トロイロのtk（クリスマスルのSP）の復刻CDを探し始めたのですが、なかなか全部がそろいませんでした（まだEUの5枚組が出る前のことです）。福岡にいる友人にその話をしたら、自分の持っているSPからコピーしてやろう、との返事をもらい、22曲をCDにコピーし、送ってくれました。この1枚とは別に次の7枚が、今手元にあります。

- ①Seven Seas K32Y 4052（キング・レコード 14曲）
- ②Music Hall MH-246529（インスト・14曲）
- ③ 同 上 MH-246593（歌 R. ベロン 14曲）
- ④ 同 上 MH-246600（歌 J. カサル 10曲）
- ⑤ 同 上 MH-246605（歌 J. カサル 10曲）
- ⑥ 同 上 MH 10.016 2（歌、インスト混在16曲）

*ここに入っている歌手たち：R. ゴジェネチェ
E. リベロ、J. カサル、R. ベロン、A. カデナス
C. オルメード の6人

- ⑦SONO SUR 813-100038 （混在 16曲）

** このCDは2度目のアルゼンチン・ツアーに行った時、オプションで行ったボリビア・ラパスの街で見つけて買ったものです。



大阪の会 記念CD

1994年、定年退職になりますが希望すれば退職後「嘱託」の身分で2年間は会社に残れます。これを有効に利用することにしました。丁度そのころ福岡の仲間からアルゼンチン・ツアーに行かないか、と誘いがありました。予定は翌年（1995年）のゴールデン・ウィークに約2週間。嘱託でもあり、少し長い休暇を取るのもそれほどの気兼ねもないことだし、

行くことにしました。

うんざりする長いフライト（当時のバリグ・ブラジル・エアーが日本航空との共同で運行していた）で、ロス・アンジェルス、サンパウロ経由で、やっとブエノス・アイレスに到着、ホテルにチェック・イン、一休みして夕刻早速迎いのバスで、先ず行ったのがタンゴ・バーでした。「バー・スール」だったか、「ラ・クンパルシータ」どちらが先だったか覚えていません。とにかく初日の夜この2軒に行ったのでした。幸いだったのはガイドさんが日系3世のメルセデスさんという若い女性で、話す日本語は発音もアクセントも全く正確なもので、一緒に行った福岡の連中はその前にもブエノス・アイレスに行っており、その時についたガイドさんがとても良い人だったということで、彼女を指名したということだったのです。（ただし、彼女は日本語の読み書きは全く駄目です、と言っておりました）。彼女はどこの店ではいつ、だれが出ている（ガイドなら当然のことでしょうが）小さな店でのライブやら、華やかなショーまでいろいろと案内してくれました。バー・スールでオスバルド・ベリンジェリとエルネスト・バファのデュオを聴くことができました。ほとんど調律もされていないようなスタンド・ピアノですが、ベリンジェリが弾くとそんなことをまったく感じさせない演奏でした。

ラ・クンパルシータでは、店に入ると目の前でポDESTAが歌っている…。これも感動でした。

2年後の97年、2度目のツアーに出ます。この時もゴールデン・ウィークを利用しました。ブエノス・アイレスに着いたのが5月1日、～記録を残していないので写真の写し込みの日付に従っています～ホテルで一休みして夕刻から“活動開始”、「La Cumparsita」へ。ガイドは前回と同じメルセデスさん。この2回目のツアーにはエンリケ岩尾さんとバンドネオン奏者・佐川峯さんが一緒でした。それともう一人、福岡のプロのピアニスト・立光（たてこう）さんがいました。ガイドのメルセデスさんが店に知らせたのでしょう、早速舞台に呼び上げられ即興の演奏が始まります。客席はやんやの喝さいでした。佐川さんは、ご承知の方もおられますが、現在90歳、今も広島にお住まいで、お元気で後進の指導にがんばっておられます。この日は多分、この店だけだったと思います。

翌2日は「Sabor A Tango」へ。オープンしてまだ2週間とか、塗装のペンキの匂いが残っていました。

ショーはアティリオ・スタンポーネがメイン。女性歌手がパトリシア・ベル。ここでもエンリケさんが舞台へ呼びあげられ数曲歌を披露しました。

このあと、「Bar Sur」へ流れております。



—97年5月1日「La Cumparsita」にて。
左からエンリケ岩尾、立光映二、佐川峯の各氏



一同5月3日「Viejo Almacén」にて
Virginia Luque の隣が筆者

3日め。2年前（1995）のツアーの時は「El Viejo Almacén」はクローズされていましたが、今回は、やっていました。この時はビルヒニア・ルーケがメインのゲスト、彼女の伴奏を付けたのがたしか、セステート・スールだったと記憶しております。ほかの出演者は、フリアン・プラサ。このとき彼はピアノではなく、バンドネオンを弾き、ピアノはセステート・スールのピアニストだったと思います。正に最高の面々でした。

このツアーではモンテビデオへも行きました。行きはラ・プラタ河をフェリーで渡り、～4時間くらいかかったでしょうか～これもまた素晴らしい体験となりました。

ここでは、ドナート・ラシアッティーに会う機会を得ました。これは、ラシアッティーが前年（1996）福岡で公演をしたときに、私の友人たちが食事に招待しことがきっかけとなりました。彼が、「モンテビデオへ来る機会があれば連絡をしてくれ」と言って



一同5月4日 Montevideo市で。Donato Raciatti を囲んで

帰った、ということで「ダメ元」でもいいから連絡だけしてみよう、とガイドのメルセデスさんに頼んで電話をしてもらったら、なんと、OKの返事もらったのです。

メルセデスさんの通訳でラシアッティーを囲んでの夕食会はとても楽しいものでした。この時ラシアッティーと一緒に連れてきた、地元のテレビ局の人が英語が分かるので、ちょうど私とその人のとなりの席に座り、片言の英語で彼といろいろ話をしましたが、彼の興味は、「藤沢嵐子さん」で、彼女は今どうしているのか、と熱心に聞いていました。

モンテビデオに1泊し、翌日帰路は飛行機でブエノス・アイレスへ。

ブエノスから次の目的地ボリビアへ移動。ホテルへチェック・イン、その日はゆっくり休養。

翌日ラバスの街を散策、ふと、小さな店のウィンドーの中をのぞいてみるとCDが並べられているのに気がつきました。店に入っているいろいろ探していると、トロイロが1枚ありました。先に書いたCDです。

若い男性の店員が一人だけいました。彼は聾（ろう）で、手振り身振りで何とか意味の通じる“会話”ができました。代金を払おうと、私はズボンの後ろのポケットから財布をとり出したら、その店員さんが“そんなところに財布を入れていると、スリに狙われるから危ない、内ポケットに入れておけ”と注意してくれました。こんな些細なことが、旅の思い出に残ることなのですね。

この日の午後、チチカカ湖畔の街へ移動、～ここで一泊し、このツアーの最後の日です。ラパスへ戻りリマ経由で帰国の途に就いたのでした。

この二度のアルゼンチン・ツアーで思い出されたことがあります。大学に入った年です。1955年、ある教授の話です。

その年に名前は忘れてしまいましたが、高名な指揮者が福岡公演をしたときのことです。聴きに行きたかったのですが、貧乏学生的身ではとてもかなうものではありません。公演に先立ってオーケストラの練習を学生に「公開する」ということが発表されました。もちろん、聴きに（観に）行きました。

教授の講義の終わった後で雑談として、その公開練習の話が出たのです。

その教授の話というのは、『「本当の音楽」（クラシック）を聴きたいのなら、ウィーンに、ベルリンに行きなさい』… もちろんこれは、理想ですが、たとえそれが可能であったとしてもその時代に海外旅行など「夢のまた夢」です。つまり、音楽はそれが生まれた土地で聴く、というのが本来の聴き方である、ということなのでしょう。それが、私にはその話を聞いた40年後に実現できたのでした。

一番遠い地球の裏側まで行って、「理想的な」聴き方でタンゴを聴いた、その育った土地でタンゴに“どっぷりと”浸って来た…。ベリンジェリが「バー・スール」で、おんぼろのスタンド・ピアノで弾いたのを聴くことができたのも、ブエノス・アイレスまで行ったからこそだったのです。

その教授の「雑談ばなし」が納得できたのでした。

◇ 会員動静（敬称略） ◇

前回4月1日（182名）以降は12名増えました。退会者はありません。

5月入会者 1名＝長谷川 葉子（名古屋市）

6月入会者 1名＝鈴木 啓子（東京都）

7月入会者 2名＝佐藤 利幸（横浜市）、今井 順子（東京都）

8月入会者 3名＝河辺 功（三重県）、藤木 立夫（横浜市）、多村 知子（横浜市）

9月入会者 5名＝陳 昌敬*（東京都）、下澤 博巳（千葉県）、手島 泰子（千葉県）、
細田 満理（東京都）、平田 耕治（横浜市）

9月20日現在＝194名です。（*は再入会）

FMラジオ=インターネット同時放送による 「タンゴ」の発信

[2] SIMUL RADIO (サイマルラジオ)

丹羽 宏 (四日市市)

このところ、携帯（電話）の多機能・極小化やインターネットにおける動画サイトなどのデジタル・メディア技術の発展には目を見張るものがある。

折しも、昨年（2010年）5月28日にはタッチパネル式のタブレット型情報端末の1種である、i-Padが期待の嵐の中で国内でも発売された。情報の分野においては、今まさに出版、通信など多様なメディア業界を巻き込んだ革命の幕が切って落とされようとしている。



放送中の著者

このような現実から時計を逆回転させると思われそうな話に、暫らくお付き合い頂きたい。

私にタンゴとの出会いの場を作ってくれた1950年代のメディア、「中波ラジオ放送」の齎す啓蒙効果は今もって計り知れず大きい。そこで、「FMラジオ放送」と「インターネット」のコラボレーションで生まれた『サイマルラジオ』という「ネット送信」（ストリーミング配信）について述べてみたい。

なお、「Tanguendo」誌、No.22号（2008年）の『愛好家インタビュー』では、各種のタンゴを平日の朝、ローカルFMラジオの電波に乗せているという近況を掲載することが出来た。

さらに、「Tangolandia」誌2010年秋号ではタンゴの同ラジオ放送が1500回を迎えた状況をお伝えした。その後、放送に関わる問合せやアドバイス等を頂いている。本稿はこれへのお答えの一部になると思う。また、上記の誌面ではお伝え出来なかった内容を続編という位置付けで、お読み頂ければ有難い。

【第1部】 「FMよっかいちポートウェイブ」によるラジオ放送について

「サイマルラジオ」の紹介に先立って、ラジオ放送「FMよっかいちポートウェイブ」（略称：エフエムよっかいち）について述べておきたい。

① 放送局概況

設立：1999年7月に複数の民間企業と公的機関が共同出資

- 本社スタジオ：四日市市西山町、サテライト・スタジオ：“文化の諏訪駅” ラウンジ内
- 送 信 所：市内霞町ポートタワー・ビル（特定重要港湾の四日市港に隣接）
- 可 聴 人 口：三重県北勢地域（四日市市、鈴鹿市、桑名市、いなべ市など）の約80万人
- コールサイン：JOZZ6AN-FM

② タンゴ番組

- 初期の放送の番組コールは「El Tango para Usted！／タンゴをあなたに」。
設立と略同時に月1回（45分）ながら中部地域のタンゴ・ファン（ダンス、演奏家、歌手、収集家など）がバトン・リレー式にゲスト参加するという本格的なラジオ放送スタイルで開始した。5年（放送60回）経過した時点で発展的に一区切りを付けた。
- 引き続き、リスナーからの根強い要望を考慮して、連日の朝番組へと装いを一新して再スタートすることになった。2004年12月のことである。
番組コールも「Buenos Días, Tango de Ohayo／ブエノスディアス、タンゴでおはよう」に変更した。平日（月曜日から金曜日までの5日間）の朝6時44分からの15分間として、早朝ならタンゴが流れているという番組イメージの浸透に注力した。
ゲスト参加は行わず、短時間の中で必要最小限のタンゴ情報を流している。
朝の多忙な時間ということもあって、「世界中のタンゴをBGM風に聴く」というキャッチ・コピーをコンセプトに仕立てている。類似性のない番組構成の中で最も特徴的なものは、曜日毎に種類の異なったタンゴを貼り付けていることであろう。
現在の曜日配置は次の通りである。

- ♪：月曜日はコンチネンタル・タンゴとワールド・タンゴを特集。
- ♪：火曜日は「タンゴ・ア・ラ・カルト」、つまり「歌」など他曜日になかったタンゴを特集。
さらに「リクエスト」のコーナーを設置して、毎月少なくとも1回はリクエスト特集。

応募方法 メール：tango@p-wave.ne.jp

ホームページ：http://www.p-wave.ne.jp/

葉書の場合：〒512-1103 エフエムよっかいち、タンゴ係

ファクシミリ：FAX. 059-328-8770

- ♪：水曜日は今に生きるタンゴを特集。現代のタンゴ、ピアソラ・タンゴを含む。
- ♪：木曜日はS P音源による黄金時代のレトロ・タンゴ（1920～50年代）を特集。
- ♪：金曜日はL P音源全盛時代のタンゴ（1950～80年代）を特集。

③ スポンサー殿の存在

放送企画の持ち込みに当たっては、番組提供をサポートして頂けるスポンサー殿の存在が不可欠である。

自ら外科診療を行いながら二つ総合病院を経営され、並行して地域に根ざした幾種もの介護老人保健施設を統括運営されている川村陽一 理事長にめぐり合うことが出来た。そして、「本タンゴ番組」の永続化にご理解頂くと共に叱咤激励までも頂いていることは、

何ものにも変えがたい「人生の財産」であると感謝している。

年末には放送開始から12年（当初タンゴ番組の期間を含む）迎えることになる。

因みに、理事長は医学生時代にサロン・ダンスのステップの楽しさを知ったと仰る。

【第2部】 Simul Radio（サイマルラジオ）

「サイマルラジオ」とは、ローカルFM局のようなコミュニティ放送局が自主制作した番組を放送（電波送信）と同時にネット配信することを「サイマルラジオ」と名付けたもので、2008年6月から実践されている。

全国にあるFMコミュニティ放送局の内、このシステムに賛同した40局ほどの有志が「サイマルラジオ」Webサイトの運営組織である「Community SimulRadio Alliance 事務局」（CSRA事務局、代表者：木村太郎）に加入している。

サイマルラジオの参考サイト：<http://www.simulradio.jp/info/sitepolicy.html>

① 「サイマルラジオ」設立の目的

コミュニティFM放送局は総務省（電波管理法）による設立基準が、1区市町村に1局と規定されているため、通常20Wという小さな電波出力となっている。この低出力には問題がある。市街地なら大型建築物、橋梁構造物の周辺あるいは山間部や盆地状地形といった地域では、本来の目的である非常時の緊急防災情報が受信出来ないことが明らかになり、公的情報の不公平感が指摘されている。交通情報、生活情報といった地域のピンポイント情報に関しても受益の優劣は同様に発生する。

こうした住民のハンディを本質的に解消出来る手段の一つとして、FMラジオ局が同時配信するウェブ・サイト情報の活用がある。現在、全国的にパソコンは普及しており、放送電波の受信不能環境にあっても必要情報をタイムリーに取得することが出来る。

② 必要としている他地域への情報開示

「サイマルラジオ」は上記のようなウェブ・サイト情報に限らず、医療、社会福祉、娯楽など生活一般に関する番組も聴取可能であるため、より広域に亘る活用が今後期待される。

③ ストリーミング配信の受信

一般的に行われている、音声・映像ソフトの「Windows Media Player」により再生出来る。パソコンなどの受信機器に取り込まれていなければ、「Windows Media Player 9以上」をダウンロードすればよい。

Google、Yahooなどの無料サイトからの検索・聴取手順は【第3部】で後述する。

④ 「サイマルラジオ」の利用規約

利用規約は16条にも亘る長い条項であるため、利用者にとっても十分な理解しておく必要のある“第8条（知的財産権）”のみ、全文を掲載するにとどめる。

i) 利用者は、本サービス（サイト送信）を通じて与えられる本サイトが利用者に提供

する情報（映像・音声・文章・写真・ソフトウェアを含む）が、著作権、商標権、特許権、又は他の知的財産権など、夫々の法律により保護されていることを認め、又同意する。

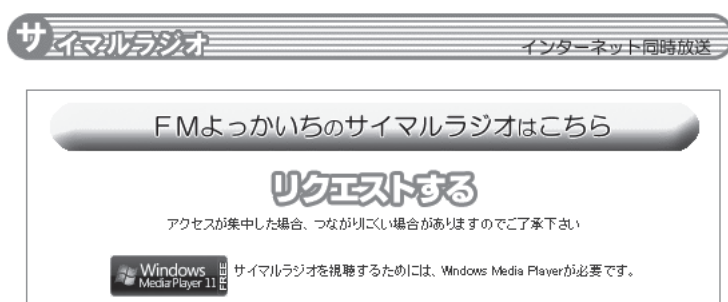
ii) 利用者が、本サービスを通じて与えられた情報を本人の私的利用のための複製を除く“複製”や第三者へ配布することの一切を禁止する。

【第3部】「エフエムよっかいち」をWebサイト《サイマルラジオ》で聴く タンゴ番組

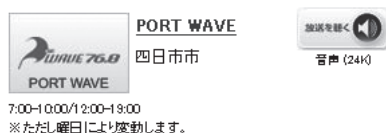
① ネット検索サイトからの入り方

ステップ1 エフエムよっかいちPort Waveを検索で呼び出すか、次のページ・アドレスwww.p-wave.ne.jpを開く。

ステップ2 初期ページの上段に並ぶSimal Radioをクリックすると、次のようなサイマルラジオの入口画面が出る。



ステップ3 FMよっかいちのサイマルラジオはこちらをクリックすると現れる画面。右側の音声マークをクリックすると、Windows Media Playerの画面に移行する。上記の音声再生ソフトが導入されておれば、15秒以内に音声を聴くことができる。



② 放送予定プログラム

曜日毎に種類（分野）の異なった4曲前後のタンゴ特集については既に説明した。このスタイルによるプログラムは、およそ放送1ヶ月前に下記のホームページで公開している。
http://www2.cty-net.ne.jp/~enri_que/index.htm

【おわりに】

主体となるFM放送は早朝番組である。しかもローカル放送であり、リスナー人口はどうしても固定されてしまうのは致し方がない。一方、日曜日の夜9時から行っている1週間分の一括再放送は、FM放送のリスナーよりも、同時にネット配信される「サイマルラジオ」のリスナーの方が圧倒的に多い。従って、「サイマルラジオ」によりタンゴが一般の音楽ファン層に拡散するかどうかの鍵は、大都市圏をはじめ全国津々浦々のウェブ・サ

イト・リスナーが握っているのではなかろうか。

このところ、市民権を得つつある多機能・高性能な携帯端末機器、スマートフォンの存在は、「サイマルラジオ」にとって心強い存在である。ネット放送聴取の可能性があるためである。

放送を聴きながら、パーソナリティーとの双方向の遣り取りも出来、新世代向きと言えよう。こういったリスナー構造を考えるならば、「サイマルラジオ」という啓蒙の手段を駆使するために放送内容の充実、つまり更に魅力的なタンゴ番組に遷移させねばならない。

クラシック、ジャズ、ハード・ロックなどの領域に接岸したり往来する現代タンゴの存在は、大いに剋目すべき時代の流れといえよう。番組構成者として、これを疎外してはならないと考えている。完成度の高いスタイルの伝統的なタンゴと共に、さらに進化を続ける器楽演奏の紹介は当然であるが、タンゴ発祥の原点である「ダンス」や「歌」の紹介も忘れないでいたい。

何れにしても、タンゴの若い世代への啓蒙活動という大命題に、ラジオ局やスポンサー殿の協力のもと、微力ながらベクトルを合わせたいと考えている。諸兄のご支援を戴ければ幸甚である。

(編集部注：この原稿は前号に掲載すべく入稿していたものですが、紙数の関係で今号に載せることになりました)

10月9日 第1回NTA主催ミロンガ



詳細はTANGUEANDO EN JAPÓNの次号 (No.29) 掲載の宮本政樹さんの報告をご覧ください。

連日のタンゴ三昧

山本 雅生 (神戸市)

私の住んでいる神戸を初め近辺の町では結構タンゴの集いが有りまして、今年になってからでも、「民音のコロール・タンゴ」を始め上半期だけで約20回位の大きなコンサート、小さなライブハウスでのコンファートのライブ、NTAの「関西リンコン・デ・タンゴ」等々 20回程の集いが有りました。

その中で6月12日(日)昼に姫路で行われた「アストロリコ4to」と翌13日(月)夜に神戸六甲で有った「トリオ・ロス・ファンダンゴス」を聴きに行ってきました。12日夜には神戸元町で「スールース」と云うクアルテートのライブも有ったのですが、時間の関係で参加が出来ませんでした。

姫路のライブはNTA会員の圓尾さんが頑張って、会場の用意から始まって大変な努力をされて開催をしたのですが、詳細はNTA会員の鈴木忠夫さんがレポートを書いて下さいますので、割愛をさせていただきますが、マイクを使わず生音での素晴らしい演奏を聴かせて頂き、感激を致しました。

翌13日は六甲にある「里夢」と云うライブハウスで「トリオ・ロス・ファンダンゴス」と云う九州福岡を中心に活躍をしているコンファートを聴きに行きました。私がこのトリオを聴くのは3回目ですが、何時ものライブとは違う期待で参加をしたのです、と云うのもメンバーを見て頂ければお判りになられると思いますが、

いわつなおこ・・・・・・・・・・アコーディオン

秋元多恵子・・・・・・・・・・ピアノ

谷本 仰・・・・・・・・・・バイオリン



ファンダンゴス 谷本 仰、いわつなおこ
ポル ウナ カベサを歌っているところ



ファンダンゴス 秋元多恵子

と云う編成で独自のアレンジとアコーディオンの超絶技巧で、大向こうをうならせる素晴らしいタンゴを展開して呉れるのです。何でも結成は1999年ですから既に12年に為る訳で入れ替わりの激しい「業界」にあって中々頑張っていると思われます。既に2006年には聖地ブエノスアイレスに遠征も果たし、CDも4枚発売をしている様です、

当日のプログラム

第 1 部

- 1 バンドネオンの嘆き
- 2 40年代のミロンガ
- 3 うそつき女
- 4 夜明け
- 5 白い小鳩
- 6 ブエノスアイレスの夏
- 7 ギャロップ
- 8 恋人も無く
- 9 リベルタンゴ

オトラ ラ・クンパルシータ

第 2 部

- 1 ポエド
- 2 吟遊詩人
- 3 ガジョ・シエゴ
- 4 心の底から
- 5 タンゴ好きのお嬢さん
- 6 さらば草原よ
- 7 想いの届く日
- 8 首の差で
- 9 ドン ファン

ベラノ・ポルテーニョ オプリビオン ミロンガ・デル・アンヘル 等のピアソラもん等も手がけている様ですが、私の聴く限り、早いテンポの「これでもか!!」と云った演奏の方が似合う様に感じました。

元来日本のタンゴ楽団は“真面目”な演奏をする処ばかりの様ですが、このトリオは譜面台と云う物が無くて、全員が全曲をメモリーでやってしまうのです、全員素晴らしいテクニシャンで、大したもん!と思うのですが、中でもアコーディオンの「いわつなおこさん」が聴かせて呉れる鮮やかな“バリエーション”はそれはもう本当に素晴らしい内容で、クンパルシータ・・・カナロ エン パリ・・・レクエルド・・・マラ フンタ・・・等、目にも止まらぬ超絶技巧は、私などの持っている「バンドネオンでない」との固定観念を吹き飛ばす快演奏だと大感激をしました。

大阪は茨木市の出身?でバイオリン奏者の谷本さんが、司会・解説を大阪弁を駆使して漫談調で進めるのですが、これが大変な「シーショー」(調子が良い)で旧来の「教えてやる」式の学術式解説と違って大変面白く、ベテランは兎も角、初めてタンゴを聴く初心者の方々にも受け入れられていた様でした。(何遍も聴いていると鼻につく処も有る様ですが)「ポル ウナ カベーサ」では歌の出だしの処を「ホンノ チョットダーケ マケチャッターノーヨ」と客に唄わせたり、バイオリンとアコーディオンは客席の中に入って回ったり、お客さんを喜ばせる仕掛けを色々工夫している様で従来型の几帳面な演奏を聴くのととは相当違った雰囲気を作っていた様でした。和製エンリケ クッチーニと云った処でしょうか? 騒然としたうちに終わってしまいました。

「エドゥアルド&グローリアの見たタンゴの歴史50年」
“アルゼンチン・タンゴの歴史と魅力” セミナー聴講記
杉山 滋一

2011年6月23日（木）午後7時～8時30分まで渋谷区恵比寿REVCセミナールームに於いて表記のセミナーが開催された。そもそもこのセミナーは6月14日に日本アルゼンチン協会との共催でフランシスコ・カナロ来日50周年記念特別セミナーとして企画されたものであるが、チリーの火山噴火の影響でエドゥアルド夫妻が期日に来日出来ずキャンセルとなった。夫妻は6月18日の横浜でのダンス世界選手権アジア大会の審査委員長として辛うじて大会前日の17日に来日出来て事なきを得た。

当初予定していたセミナーがキャンセルになったが「折角なので帰国を遅らせてでも是非とも行いたい」という夫妻の申し出に対してラティーナ社の本田社長が、会場確保、日時確定、映像音声設備手配、開催告知、夫妻滞在費用負担などにご尽力され、急遽復活したもので、ここに深甚なる謝意を表す次第である。

会場は約100人収容、東京近郊のNTA会員、日本アルゼンチン協会関係者にヒロシ&キョウコのダンス教室関係や旧中南米音楽社社長中西環江氏をはじめ、ラティーナ社関係などで満席状態であった。エドゥアルドの作成したDVD映像を駆使したセミナーでツボを得たレクチャーを高場副会長の懇切な通訳で対応し理解を深めることが出来た。

では、以下に「タンゴの生き証人」とも言えるエドゥアルドのレクチャーを順を追ってトレースしていくことにする：

こんにちは、エドゥアルドです。今日は私にとって非常に感動的な日です。多数の方にお話が出来るのはとても喜ばしいことです。エドゥアルド&グローリアの歴史を日本での事柄を通してお話し

たいと思います。それは50年前のフランシスコ・カナロと帯同して来日した時に始まりま

す。日本ではそれ以前、古くは1920年代の目賀田男爵の活動やタンゴレコードの発売など



がありましたが、やがて第二次大戦による暗黒の時代になってしまいます。1953年に藤澤嵐子の訪重、54年にはファン・カナロが初めての訪日楽団として日本の地を踏みました。

1955年頃ペロン大統領のタンゴに対する保護政策で、映画館では幕間にタンゴ楽団のライブをすることが義務付けられ、私はそのステージでタンゴやフォルクローレを踊っていました。やがて58年頃私はグロリアとカップルを組んで踊るようになり、それがカナロの目に留まりました。1960年にカナロ楽団に参加しミュージカルの中で踊るために起用してくれて、私たちに目を掛けてくれました。

そして1961年に読売新聞の招聘でカナロ訪日の件が持ち上がり、私達もメンバーに加わるように言われました。しかし問題が生じました。グロリアは当時14歳で母親の同伴が必要だったのです。カナロは是非とも2人を連れて行くと言い、グロリアは母親が同伴しなければ行かない言う。こうした板ばさみの状態をマネージャーのミゲル・カバジェーロが良い知恵を出してくれた。母親をダンサーということにして合わせて3人の登録をした。当時のプログラムにはそうなっているはずだ。だが私は体重80キロのパートナーと実際に踊ることはしないで済んだよ（笑）。

日本への旅はチリー、ペルー、メキシコ、シアトル、バンクーバー、羽田という各駅停車のような行程だった。（新宿コマ劇場のステージなどの模様のDVD投影）私の記憶するところでは、1961年12月25日にはカラー放送の実験放送があったはずだ。照明がとても強くて辛かったことを覚えている。この公演以降次々に楽団が来日するようになった。私は本格的なアルゼンチン・タンゴ・ダンスを皆さんの前で披露出来たと思い、カナロが日本でのタンゴ楽団の演奏と歌、ダンスの道を切り開いたと確信している。

帰国後さまざまな仕事が入って来て、やがてグロリア&エドゥアルド舞踊団を結成した。1966年には2人は結婚した。その後ラテンアメリカとアメリカ本土を、着物スタイルの坂本政一楽団と帯同して公演して廻った。その中で1967年ニューヨークで、かの有名なエド・サリバン・ショーにも出ることになったりした。

（NY、プエルトリコ、メキシコなどでの坂本楽団とのTV映像のDVD投影）1972年には民音の企画でフロリンド・サッソーネ楽団と共に2度目の訪日。約3ヶ月各地でアルゼンチン・タンゴ・ダンスを披露した。TVにも引っ張りだされた。（TV出演のDVD投影）サッソーネとの仕事を終えて私達はメキシコでマリアーノ・モレスと公演することになった。日本でメキシコ入国ビザがBsAsから届くのを待っていたが時間が掛かった。その数日間ブラブラしているのも良くないので仕事をしようということになって、当時の中南米音楽社の中西環江氏の計らいで私達が日本で初めて本格的なアルゼンチン・タンゴ・ダンスのレッスンを3日間にわたって行うことになった。（レッスン風景DVD投影）この映像の中に今日来場されている方の幾人かが映っているでしょう。（笑）

1973年にはモレスとメキシコ・ツアー、さらに翌年はソビエトにも行きました。読売新聞の招聘で1974年に再びカルロス・ガルシアの率いる楽団と共に来日公演を行った。問題はこの時グロリアが懐妊していたことだ。事前の宣伝でグロリア&エドゥアルドのダンスと告知をしてしまっていた。困った私達は中西社長と相談し、グロリアに姿かたちが似た踊りの上手なダンサーをBsAsで探し出した。日本公演は代役でこなし、観客の方々

には気付かれずにすんでホッとした。このことは今だから言えることだけれど（笑）。

この時のオールスターズ楽団のメンバーはまことに素晴らしかった。リベルテラ、アウマーダ、フランチーニ、ネグロ・ロドリゲス、ガルシアなどこの音楽家たちの演奏ぶりを見てください。

（楽団演奏、TV出演などDVD投影）こういう人々と仕事が出来たことは忘れられない。これほどのメンバーを集めることはBsAsでも難しい。それが日本へ来たことは驚きと共に感激です。来日のために特別編成されたことを日本の皆さんに感謝したい。人生には素晴らしいことが起こるものですね。1961年カナロと共に来日して以来、ラティーナの中西さん、日本のタンゴファンの皆さんのお陰です。

さて、その後の公演で、日本ではもっと大きなものが必要だった。それがタンゴ・アルヘンティーノだ。パリからニューヨーク・ブロードウェイで大成功した後、1987年来日した。私達をはじめコーベスなどが参加し、世界的なタンゴ・ダンスのブームのきっかけになったものだ。この公演のプロモーションは大変大がかりで新聞、TVなどでブロードウェイ成功が大きく取り上げられた。（来日公演の新高輪プリンスホテルでの著名人参加のレセプションとTV各局でトピックスとして報道されたもののDVD投影） そのおかげでタンゴブームが一層盛り上がり、タンゴ公演を受け入れる土壌を一変させ、ダンサー達の進む道を切り開いた。タンゴショーという新しい概念が生まれたのです。ダンスが5組程度出るとは普通になりました。私達のカップルも日本に於いて中心的な活動することに繋がったのです。（1984年モレス楽団公演に於けるダンスシーンのDVD投影）

1988年には日本外務省企画中南米フェスティバルの催しとして「タンギシモ」で来日した。ネストル・マルコーニ楽団に超大物歌手ロベルト・ゴジェネチェとネリー・バスケス、踊りは私達のほかにモニカ&ルシアーノ、ソト&ミレーナという組み合わせで、わずか神戸と東京2ステージのみという短期間だったが凄いショーだった。（東京公演のダンスシーンとゴジェネチェの歌DVD投影）

その間も平行してモレスとの仕事をこなして何度か日本公演を行った。今では世界的に有名になっている当時の若いカップルを用いた振り付け依頼を数多く引き受けた。（1988年モレス楽団公演ダンスシーンDVD投影）

私達の舞踊団はこれらのショーの成功の中で、企画立案、構成、演出、出演、監修まで一貫して行うタンゴショーを行うことになるのです。1992年の「タンゴ・タン



ゴ」1994年「タンゴの心」がそれです。グローリア&エドゥアルド・タンゴ舞踊団来日公演とタイトルされて舞踊団の名前が大きく前に出ることになりました。ストーリー性のあ

る構成になっているので、ダンサー達も歌手も芝居をするための演技力が、ダンス技量や歌唱力と同時に求められることになるのでした。それを皆が喜んでやってくれました。この公演では古き良き時代のBsAsの雰囲気要充分出すために、アルゼンチンから昔の衣装も持ち込みました。(1992年、1994年のステージの有様をDVD投影)私はどの場面でもタンゴが溢れているように心掛け、それを若いダンサーに引き継ぎ全てを伝えることに努めました。タンゴのエッセンスをダンスを通して多くのファンに喜んでもらいたいと思っています。もっとやりたいが、時間の制約もあるしほぼ話しを尽くしたと思います。これで日本における私達のタンゴの歴史を閉じることにします。私達の次の世代も育って来ましたし、私達は今後もこの道を生きていくことが出来ます。

このセミナーを開くことが出来てラティーナの本田さん、中西さん、今日ここにおいで
のタンゴ仲間の皆さんに感謝します。

予定の講演時間を20分以上超過しての熱の入ったレクチャーであった。終了後も旧知の人々やヒロシ&キョウコらと話が弾み、その輪がなかなか解けなかった事を見てもエドゥアルド&グローリアのタンゴダンスに掛ける情熱の力強さが分かる気がしたものである。参加者一同懐かしい来日時映像と語りに満足した一刻であった。

写真提供：丸岡将泰氏（会員）

Pablo Ziegler Meets Tokyo Jazz Tango Ensemble 公演(2011年6月22日)レポート

山本幸洋（東京都）

大編成からコンボに切り替わる時、そのグループの表現力はプレイヤーの表現力に負うところ大となる。優れた奏者であることはもちろんのこと、優れた構成力も問われてくるし、グループとしての呼吸も重要だ。音楽に、このような価値観が持ち込まれ世に広く知られるようになったのはビ・バップが筆頭格である。タンゴにおいても古くはフリオ・デ・カロであろうが、その音楽の芯はタンゴであって、タンゴとジャズの接点が明確になるのは、やはりアストル・ピアソラ～オクテート・ブエノスアイレスであろう。そして、その線上にある現代の音楽家には、アドリアン・イアイエスのようにスタンダード素材としてタンゴ曲を多く取り上げトリオで丹念にアドリブを展開させる例と、パブロ・シーグレルのようにピアソラ五重奏団のサウンドを色濃く持ちつつ爆発的なアドリブが特徴的な例がある。世界各地のジャズ・クラブへの出演もある両者に明確な差があるわけではない

が、ピアニストが率いるモダン・タンゴのあり方としてジャズ度が高い? のは、ベースとの連動を重要視しないシーグレルであろうか。そして、その個性が80年代のピアソラ五重奏団の魅力のひとつである。

ピアソラ生誕90周年記念公演、シーグレルは日本のミュージシャンをオーディションで選んだ。まずエレキ・ギターの鬼怒無月(きど・なつき)は、ボンデー・ジフフルーツという結成20余年というバンドを中心に活動している。コントラバホの西嶋徹、バンドネオンの北村聡、ゲスト参加のヴァイオリン会田桃子はジャンルを超えたセッション多数、特に3人参加のクアトロシエントス、後二者オルケスタ〜アウロラなど現代の日本のタンゴ・シーンを支えるミュージシャンである。会場は浜離宮にある朝日新聞社東京本社間近の朝日ホールで、木を多用した美しい会場である。

基本編成はシーグレル〜鬼怒〜西嶋〜北村のクアルテートで、ドラムスなし/バンドネオンあり/ヴァイオリンなしという、このところのシーグレルのレコーディングとだいたい同じ。レパートリーは別掲のとおり最近の標準的なもの、言わばシーグレル・バンドの東京版という趣きだ。最初はやや硬さがあったように思うが、②⑤では古典曲あるいは昔のボカをモチーフにしたり、幼少のピアソラが暮したニューヨークをイメージした⑥に、作曲家と



フライヤー

公演プログラムと過去に収録されたアルバム

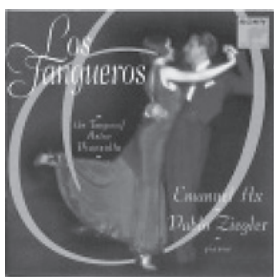
parte 1	① Michelangelo '70	c, g
	② Alredor del Choclo	a, e, g
	③ La Fundicion	f
	④ Introduccion Al Ángel	d
	⑤ La Rayuela	g
	⑥ Astor's Places	e, h
	⑦ Fuga Y Misterio	b, f
parte 2	⑧ Milonga Del Adios	f
	⑨ Buenos Aires Report	h
	⑩ Bajo Cero	f
	⑪ Once Again... Milonga	e, g
	⑫ Muchacha de Boedo	e, g
	⑬ Chin Chin	f
	⑭ Libertango	b, h
encore 1	Adios Nonino	a, c
encore 2	La muerte del Ángel	b, c, g

※ タイトルにある🍷は会田が加わった曲を示す。

ファーストLPに関しては鈴木一哉さんにご教示をいただきました。



A La Conexion Porten-a B
Pablo Ziegler y su Cuarteto
Tango Nuevo
Columbia/SONY 120.16
1991, 1991



B Los Tangueros C
Emanuel Ax - Pablo Ziegler
SONY SK62728
1996, 1996



D Asfalto-Street Tango D
Pablo Ziegler & His Quintet
For New Tango
BMG 09026-63266-2
1996/97, 1998



E Tango Romance
Pablo Ziegler - Orpheus
Chamber Orchestra
BMG 09026-63233-2
1997/98, 1998, 1996, 1996

してシーグレル、その着想に改めて感心した。④はシーグレル・バンドとしてのディスクはなく本公演の聴きもののひとつ。北村の透明感のあるトーンが会場に染み渡った。前半ラスト⑦、曲の特長であるメロディが内包するリズム感とフーガ形式が、メンバーのポテンシャルを余すことなく発揮させた。クールな北村も西嶋ももはや全開というカンジで、会場全体も沸きに沸いた。

後半は、シーグレルと会田のドゥオ⑧でスタート。シーグレルのソロ、特に活動初期においてはシン・バンドネオン／シン・ビオリンを宣言していたくらいだから、どのようにアレンジされるのか興味深く思っていた。結果的に、ヴァイオリンのパートは素晴らしく創造的なパフォーマンスだったと言える。クアルテートに戻り⑨～⑫は



copyright: 菊地昇

シーグレル作品が続く。前半の加速感が残っており、メンバー全員の出す音に存在感があった。特にシーグレルのピアノはスピード感がすさまじく、期待通りにライブで真価を発揮していた。また鬼怒のプレイにもハッとする場面が幾度となくあり、前後半を通じてシーグレル・バンドとしての親和性に脱帽した。そしてハイライトはアンコールを含む⑬以降の4曲。⑬⑭は80年代ピアソラ五重奏団の人気曲だが、⑬の鬼怒、⑭の会田の存在感は際立っていた。⑭後の拍手は熱狂的だったし、そういう演奏をこのバンドが見せてくれた。

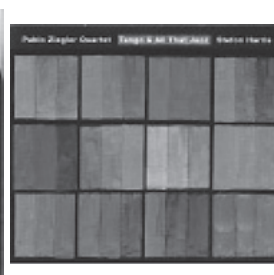
アンコールは代表曲「アディオス・ノニーノ」で、これもシーグレルのバンドとしての本質的なレコーディングがないもの。ピアソラ五重奏団としての人気曲だが、冒頭のピアノのカデンツァはなく、バンドとしての見せ場を重視した構成をとった。そのドラマチックな演奏に拍手は鳴り止まず、再び登場して「ムエルテ・デル・アンヘル」。シーグレルも何度もレコーディングした曲であり、この東京バンドが一級品であることの証であると感じた。



E Quintet for New Tango F
Pablo Ziegler
BMG 09026-63500-2
1999, 1999



Bajo Cero G
New Tango Duo
enja CD9145-2
unknown, 2001



Tango & All That Jazz
Pablo Ziegler Quintet
kind of blue KOB10017
2005, 2007



H Buenos Aires Report
Pablo Ziegler-Quique Sinesi
with Walter Castro
zoho ZM200711
2006, 2007

タンゴダンス世界選手権アジア大会を見て

海部 英一郎* (藤沢市)

今年の第8回アジア大会は昨年と同じ横浜・大榎橋ホールで7月18日(土)予選、19日(日)準決勝・決勝の日程で行われました。予選へのエントリーはサロン部門67組、ステージ部門17組で、開始当初に比べサロン部門の出場は年々増え、ステージ部門は少しずつ減って最近はこのレベルになっています。第1日はこの中からサロン部門30組、ステージ部門10組が翌日の準決勝に進むことになりました。19日は12時過ぎから両部門の準決勝が始まり、サロン10組、ステージ6組の決勝進出者が決まります。

サロントANGOは予選もそうですが主催者が用意した曲を3曲ずつ、前後2回即興で踊ります。この部門には①カップルは一度組んだら音楽の続く間、離れてはいけない ②カップルのどちらも膝の線より上につま先を上げてはならない、この範囲でバリエーション・床に着いたサカーダ・エンロスケなどへは許される ③ガンチョ・跳躍・リフティングその他ステージタンゴの振付と考えられるのはすべて排除・・・という厳しいルールがあります。ステージタンゴは各自で振付し、用意した曲で2回ずつ踊ります。

今年の審査員はアルゼンチンからエドゥアルド・アルキンパウ(委員長)、グローリア・アルキンパウ、ホルヘ・トーレス、マリア・ブランコの4人、日本側から山尾博史(ヒロシ)、池本亮、鍛本知津子(チズコ)、漆原美影の4人、計8人で行われ、最高と最低点を除いた点数の合計点で争われます。決勝の審査は上記から鍛本、漆原の二人を除いた6人で行われていました。入賞者は次の通りです。

○サロン部門

1位	リリー&レイモンド	香港	37.4点
2位	パソ・ハン&ミスン・カン	韓国	36.8点
3位	ヒロミ&ナツ	東京	36.6点
4位	ジーン&ユニ	韓国	35.5点
5位	高志&めぐみ	東京	35.1点
6位	リナ&マサ		35点
ベストドレス賞	エミ&フク		
ベストカップル賞	ツギ&ミズキ		

○ステージ部門

チャコ&タツキイ	尼崎	38.5点
高志&めぐみ	東京	36.5点
中沢源太&マナ	東京	35.6点
エイイチロウ&りか	東京	34.9点
ロドリゴ&ナツ	広島	34.5点
天野由高&清水みき	東京	34.0点
ロドリゴ&ナツ		
原貴彦&加藤舞子		

19日は決勝の審査点集計の間、オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダの演奏、美影&有彩、亮

&葉月、ヒロシ&キョウコ、マリア・ブランコ&ホルヘ・トーレス、グローリア&エドゥアルドのデモ、オルケスタ・アウローラの演奏がありました。アウローラでは折から来場していたパブロ・シーグレルが壇上に呼ばれ、青木菜穂子に代わってピアノを演奏する珍しいコラボレーションもありました。

この後、18時過ぎから舞台上で審査結果の発表と表彰式（写真）が行われ、最後にサロン・ステージ両部門の優勝者のデモンストレーションで、栄冠に花を添える踊りが披露され、2日間の大会を終了しました。



サロン部門の表彰式 中央のプレートの2人がリリー & レイモンド（香港）

アジア大会の歴史は後記の通りですが、タンゴダンス世界選手権はこの1年前、2003年3月から始まっています。この時「こんな催しがあるので私たち出てみるわ」と言って藤沢市在住の布施美智子・小川裕男のお二人が出かけて行ったのを覚えています。結局日本からサロン部門2組、ステージ部門2組が出場し、布施・小川ペアはサロン11位になりました。私が発行している会報第82号（2003年4月刊）には布施さんの妹・桜庭真美子さん（横須賀・タンゴクラブ・マナティ主宰）が観戦記を寄せてくれています。彼女は“ブエノスアイレス・タンゴ・フェスティバル”と書いており、果たして世界選手権と名乗っていたのか私には分かりません。

翌年ブエノスアイレス市からアジア大会の開催を打診された(株)ラティーナ社は、どう運営したらよいかよくわからず「1回だけ引き受けてみるか」が実状だったと述懐しています。当然出場者も思い通り集まらず、ラティーナの某嬢に強制され、私も数合わせで出場しました。当日いきなり「離れて踊ってはいけない」とか「ガンチョはいけない」と言われ、付け焼刃のルールだなと思ったのを覚えています。この回のステージ部門の採点ではある審査員がご自分の弟子に満点を入れ、他に0点を入れるという問題が発生、大騒ぎに

なったのは有名です。翌年からこの審査員には外れて貰い、採点も最高と最低を外して集計し、各自の採点を公表することになりました。

一方翌年からブエノスアイレス側でも真冬の8月にずらして行うことになり、2008年、市長が代わり、現地では「もうやらないのでないか」と言う噂が流れていました。これはマクリ新市長が新体制を作る作戦だったらしく、その後も継続して行われ、8月の約半月「タンゴ・ブエノスアイレス」と言う名で前半はコンサートや有名ダンサーの無料レッスンなど様々なイベントがあり、後半の1週間で世界選手権（ムンデル）が行われ、ブエノスアイレス市として無くてならぬ行事になっています。

アジア大会の歴史

回	年月日	会場	サロン優勝者	ステージ優勝者
1	2004年7月3・4日	竹芝・ニューピアホール	美影&有彩	安部恵&荒木陽一
2	2005年6月25・26日	同上	Masa & Tina	亮&葉月
3	2006年6月3・4日	同上	ヒロ&ミホ	棚田晃吉・典子
4	2007年5月26・27日	五反田・ゆうぽーと簡易保険	サエ&ファン	ギュー.&ラム
5	2008年7月19・20日	目黒・パーシモン大ホール	ヒロシ&キョウコ	エイイチロウ&トモコ
6	2009年7月4・5日	シーバンスと大田区民ホール	クリスチャン&ナオ	美影&有彩
7	2010年7月3・4日	横浜・大栈橋ホール	亮&葉月	窪田央&間々田佳子
8	2011年7月18・19日	同上	リリー&レイモンド	チャコ&タツキイ

いろいろ困難を乗り越えて今日の姿になったアジア大会ですが、この大会のルールでサロンドンダンスとショウダンスの区別がはっきりし、サロン部門ではアマチュアにはこの大会に出る為技術の向上に努める目標になり、プロには若手の登竜門的な色彩がはっきり出てきたように思います。また日本全国から同好の士が集まってくる良い機会になっています。

今年の大会で感じた事を挙げてみますと ①サロン部門で香港のペアが優勝、韓国のペアが準優勝したのは、アジア各地のタンゴダンス熱の高まりを象徴して喜ばしい。アジア大会と言うにふさわしい姿になったと思う。 ②日本人はどうしてこんなに親がつけてくれた名を使いたがらないのだろう。横文字の出場者名がずらり並んでいる。観客としては何処のどういうカップルかさっぱりわからない。せめて出身地ぐらいプログラムに書いてほしい。 ③私はタンゴダンスの基本は、男女ともに自然体で立ち、出来るだけ肩の位置を上下動をさせないで踊るのが基本と思っています。しかし予選・準決勝を通じてかなり平気で肩を上下動させて踊っているカップルがあった。 ④レベルは確かに年々上がっていると思う。ただ男女を見ると女性の踊る姿の美しいのに比べ、男性の技術の追いつかないが目立つ。ある先生に「女性は小さい時からバレエやジャズ・ダンスなど、踊りを習っている例が多い。男性はそうはいかない」と言われましたが、タンゴダンスは90%以上男性がリードし紡ぐ踊りであり、自らの反省も含めて男性陣の更なる精進を期待したいと思いました。

*湘南アルゼンチンタンゴダンス同好会

第2回「東京タンゴ祭 2011」

コンサートレポート

杉山 滋一

〈タンゴを愛するすべての人へ贈る果てしなきタンゴの世界〉というキャッチコピーのコンセプトで、2011年8月6日（土）渋谷区文化総合センター大和田さくらホールで午後4時から第2回東京タンゴ祭が行なわれた。3月11日の東日本大震災のため当初予定していた千代田区九段会館が損傷で使用不可になり、急遽日時と会場変更になったもので、主催者ラティーナ社のご苦勞はさぞかしと思われるが、開催を待ち望んでいたファンの一人としてまずはご同慶の至りと申し上げねばならないであろう。さらに付け加えれば、前回の自由席を今回全席指定席にすることで炎暑の中の行列をすること無しの対応がはかられた。JR渋谷駅徒歩約5分のアクセスの良さと、やや小振りながら（約730席）響きの良いホールでPAにも気配りをしたことも高く評価できる結果を出した。

本年は全9楽団を3グループに分けた3部構成で各楽団毎に紹介ビデオが投影されて、自己PRを含めて曲目や演奏の狙いなど聴衆の理解を深める工夫もなされた。

それぞれを順を追ってレポートすることにしよう。（以下敬称略）

（第1部）

I. オルケスタ デ タンゴ ワセダ

- ①アル マエストロ コン ノスタルヒア ②エル チョクロ ③コム イル フォー
- ④インスピレーション

幕開けは今や唯一ともいえる学生タンゴバンドの雄の登場である。

学生バンドのいわば宿命とも言えるような上級生の卒業と新入部員生の補充と訓練に演奏力の保持向上という命題の中で、創部60周年の本年もは昨年にも増して総勢15名が熱演力演のプレーで会場の大きな激励の拍手を受けていた。

II. ラス ポジートス

- ①フェリシア ②パジャドーラ ③ロス マレアードス ④タンゲーラ

バイラブレな古典曲を中心したレペルトリオを持つ社会人のアマチュア楽団で今日は標準楽器の3.3.1.1にフルートを加えた9人編成で昨年にも続いての登場である。ここでも学生と同じように社会人として避けて通れない転勤という事柄を抱えて練習に多

少ハンディを感じることをメンバーが語っていたが（秋田県から参加）、そういった中で④などテンポ良く鮮やかなプレーを示していた。

Ⅲ. 仁詩（ヒトシ）トリオ

①小さなミロンガ（金益研二） ②ロジウラのトゥランブラン（佐藤芳明） ③スム

第1部のメは平沼仁詩（Bn）、金益研二（P）、吉田水子（Cb）のトリオがステージに登る。①、②のオリジナル作品を引っさげての意欲的なパフォーマンスで、今年も去年同様確かな技量に裏打ちされた3人の呼吸の合ったプレーはスリリングで充実しており、若い力が伸びてきていることを実感できるものであった。

（第2部）

I. 中田智也とシン ノンブレ

①ティコ ティコ ②エル チョクロ ③ラ プニャラーダ ④ノニーノ

昭和20年後期から30年代かけて日本のタンゴ楽団花盛りの頃、中田修楽団で活躍した大ベテランヴァイオリン奏者の中田智也がかつての同僚の大原一駒をBnに据えて、若いミュージシャンを組み込んだ7人編成でラテン、古典曲からピアソラまでオリジナルな編曲で披露する。③ではキンテートリアルのフランチェニがチャルメラの遊び心横溢したプレーをしていたが、それを模して中田智也がF1カーレースを表現、クラッシュして救急車の出動騒ぎを面白可笑しく芸達者なところを見せて館内大爆笑であった。

Ⅱ. セステート ヌエバ エスクエラ

①デカリシモ ②ロクーラ タンゲーラ ③マル デ アモーレス

第2部の2番手は昨年度までタンゴワセダに在籍していた4年生が新たに標準四楽器にチェロとギターを加えて編成した六重奏団で、このステージがデビュー演奏である。卒業後社会に出てもタンゴとのつながりを持ち続けて、活動の場を拡めて欲しいものだ。ライブや各種催事に足を運び顔を出して暖かく応援してあげるのも、オールドファンの勤めではないかとその一人として感ずるところである。

Ⅲ. 西塔祐三とオルケスタ ティピカ パンパ

①7月9日 ②マス グランドス
ケ ヌンカ ③ムーチョ ムーチョ
④デレーチョ ビエホ ⑤巴里の
カナロ

カーテンが上がると純白のジャケットに黒の蝶ネクタイのBnがずらりと5人並び4人のヴァイオリン陣とベースが後列に、左端にピアノという堂々たる11人編成の布陣が圧



提供：(株) ラティーナ

倒的に迫る。本年度で創設56周年で終始ダリエンススタイルを追い求め、まさに「継続は力なり」を実績で示す努力には敬服するところである。昨年の公演後でのアンケートで出演の希望が多く寄せられたパンパ楽団の5曲は、いずれも迫力満点で熱の入った演奏で第2部の締めにあつさわしく聴衆から大きな拍手が送られた。

(第3部)

I. 古橋ユキ タンゴ デュオ

①モレーナ ②レクエルド ③トリウンファル ④サンタルシアの酒場娘

昨年の五重奏団と異なり音大後輩の竹本真理（P）との二重奏でじっくりとBsAsで4年間数々の巨匠たちより授かったタンゴのエッセンスを聴いてもらおうとの意気込みが感じられる演奏である。④におけるフレージングの呼吸の中で、ふとアグリを思い起こさせるような雰囲気があったプレーであった。

II. オルケスタ アウローラ

①BsAsの夏 ②首の差で ③スム ④エル オトロ シエロ（青木菜穂子） ⑤ラサリーダ（会田桃子） ⑥ナーダ

会田桃子（V）と青木菜穂子（P）の双頭リーダーによる若手グループのトップを走る六重奏団が、リーダーの個性に溢れた自作品と並んでピアソラなど馴染みの名曲を斬新な感覚に基づくオリジナル編曲で今日的なタンゴを訴える演奏を繰り広げる。

③ではダンスカップル、チヅコ&ホルヘ・ロペスの登場で華やかなステップが目を楽しませてくれた。

III. 小松真知子&タンゴクリスタル

①エル チョクロ ②カフェ ドミンゲス ③荒城の月 ④オブリビオン ⑤来るべきもの ⑥エバリスト カリエゴに捧ぐ ⑦ラ クンパルシータ

今回のコンサートの大トリは今年で結成25周年という記念すべきときに当たるタンゴクリスタルの登場である。小松真知子の力強いピアノ、それを引き立てるか如くの小松勝のオリジナリティ溢れる好編曲が相まって、古典曲から現代的な作品まで多彩な演奏が楽しめた。②ではナツミ&ナツのダンス、④には小島りち子の歌（フランス語）が、そして最後の⑦では2組のダンスカップルが華を添える。各パートのソロにはそれぞれ腕の確かさに裏打ちされた聴かせどころが大いに有ったが、リズムの屋台骨を背負っているコントラバスの松永義孝のベテランならではの的確なそして重厚なビートをここに特記しておきたい。大編成オルケスタの魅力を十分に示してくれたプレーに満場の拍手があったことは言うまでもない。

全9楽団40曲の休憩を挟んで3時間半のコンサートを満喫し場外に出ると渋谷の街々はネオンの煌めきも鮮やかな宵になっていた。心にタンゴのメロディを奏でながらそれぞれの聴衆が来年の公演の盛会を期待しながら駅への歩みを運んでいるようであった。

「ハンコン・デ・タンゴ」



リポート：福川 靖彦

東京 「原宿クリスティー」にて

前回はあの東北大震災の直後の混乱の中、3月15日の開催で心配されましたが、熱心なタンゴファンが24名集まってくださって、担当者の私たちは大感激しました。タンゴ アカデミーの義捐活動も引き続きやってゆこうということで、7月いっぱいまで継続することにしました。私たちはあの混乱の中でも好きなタンゴを楽しめるという幸せを何に感謝すれば良いのでしょうか。好きなタンゴのためにまだまだやることが沢山あるような気がします。

第58回 2011年5月24日

出席者52名

不必要と思われる自粛ムードの中、今日の出足はどうかと少し不安な面がありましたが、いつもどおり50名を超すお客様で店内は満員、主催者としてはホッと胸をなでおろしました。明るくタンゴを聴いて少しでも元気になろうという、皆さん共通の気持ちだったのでしよう。

この会では、前回より被災地の方への募金活動を行っておりますが、その気持ちに報いる意味もあって、今回は第3部をタンゴLPレコード大抽選会ということにしました。会員の中にはコレクターが沢山いらっしゃいますので、ボランティアとしてレコードの提供をお願いしたところ、あっという間に100枚ほど集まりました。これなら空クジ無しで全員に差し上げられますし、その上もう一度できそうです。今はCD全盛ですのでかえってLPは珍しかったのではないのでしょうか。

レコードを提供して下さった方々に厚くお礼申し上げます。

第1部

コメンテーター：清水裕

テーマ：「今宵はハーモニカの競演で」



…PACO GARRIDO…

1. RECUERDO (思い出) (O.Pugliese)

伴奏：ギターラス、ギタロン

…JOE POWERS…

2. FRANCIA (フランチア) (O.Barbero) バルス
 伴奏：ピアノ、ギター、コントラバス
 …FRANCO LUCIANI…
3. SUR (南) (A.Troilo) 伴奏：ギターラス、コントラバス
4. LA PUÑALADA (ナイフで一突き) (P.Castellanos) ミロンガ
 伴奏：ピアノ
 …HUGO DÍAZ…
5. ZAMBA DE LOS CUATRO VIENTOS (四つの風のサンバ) (H.Díaz) サンバ
 伴奏：ギターラス、ペルクシオン
6. SILENCIO (静けさ) (C.Gardel 他) 伴奏：ピアノ、ギターラス

清水さんはタンゴ暦では他の誰にもひけをとらない大ベテランですが、お酒の方もそれ以上の年期が入っています。飲んで崩れず、じっくり一人で楽しむといったところは私のような下戸でも見ていて楽しくなってしまいます。東北になんとかタンゴの会をというこ
 とで、島崎会長と普及活動(?)に出向いたりされていますが、その直後に大震災が起こっ
 てしまいました。

今日は大変珍しいプログラムで、ハーモニカによるタンゴ特集です。このあたりを見て
 も、清水さんのレパートリーの広さが分ります。

第2部

コメンテーター：田原陽次郎

テーマ：「レコード業界に身をおいた私とタンゴ」



1. 思い出のタンゴ EIN TANGO MÄRCHEN
 バルナバス・フォン・ゲッツイ楽団
2. クリオージョの誇り ORGULLO CRIOLLO
 タンゴ・アルヘンティーノ TANGO ARGENTINO
3. ミケランジェロ70 <クラブの名前>
 アストル・ピアソラ楽団 ÁSTOR PIAZZOLLA
4. 嘘でしょう PARECE MENTIRA
 藤沢嵐子=ティピカ・東京 RANKO FUJISAWA=Típ.TOKYO
5. ラ・クンパルシータ LA CUMPARSITA
 マトス・ロドリゲス楽団 MATOS RODRÍGUEZ
6. 月光ソナタ CLARO DE LUNA
 ガブリエル・クラウシ (Bn.Solo) GABRIEL CLAUSI

およそタンゴのレコードを買ったことのある人は、一度は田原さんのお世話になってい

ることと思います。日本のタンゴファンの中で最も有名な一人と言ってよいでしょう。タンゴレコードの扱ひ量では日本一だった高田馬場のムトウ楽器店に長く勤務され、退職後もお自分で輸入レコードの取次ぎをされています。今日はいやがる田原さんに無理やりお願いして、レコードを販売された側から見たタンゴについて語っていただきました。普通ではなかなか聞けないエピソードもあり、楽しいひと時でした。

第59回 2011年7月12日

出席者65名

今日は後半タンゴ ワセダOB（といっても4年生。実際の活動は3年生までだそうです）の集まり、「ヌエバ エスクエラ」の演奏をたっぷり聴こうということで、前半を大澤寛さん一人にお願いしました。「ヌエバ エスクエラ」は8月の第2回東京タンゴ祭に出演が決まっています、それを先取りして聴かせてもらおうということなのです。学生バンドは卒業してしまうと、なかなかタンゴ界に残ってくれる人がいないのが現状で、やむを得ないこととは言いながら残念なことでもあります。

宣伝が効いたせいも、なんと65名のお客様で超満員、リンコンが始まって以来の快挙です。関係者は全員お客様に椅子を譲って立ち見ということになりました。

第1部

コメンテーター：大澤寛

テーマ：「今宵はワルツとミロンガで」



(Valses)

- | | |
|--|--------------------------|
| 1. Orillas del Plata (M) Juan Maglio | (Orq.) Juan Guido |
| 3. Lágrimas y sonrisas (M) Pascual de Gullo | (Orq) Rodolfo Biagi |
| 5. Un placer (M) Vicente Romero | (Orq) Aníbal Troilo |
| 7. Desde el alma (M) Rosita Melo | (Orq) Ricardo Tanturi |
| 9. El viejo vals (M) Charlo (L) José González Castillo | (Orq.) Francisco Rotundo |

(Milongas)

- | | |
|---|-------------------------|
| 2. Silueta porteña (M) Nicolás Luis Cuccaro/Juan Ventura Cuccaro (L)
Ernesto Nolli | (Orq.) Francisco Canaro |
| 4. Campo afuera (M) Rodolfo Biagi (L) Homero Manzi | (Orq) Edgardo Donato |
| 6. Todos te quieren (M) J.Felipetti | |

(Orq) Ángel D'Agostino

8. Rosa carmín (M) Juan Carlos Cobián (L) Enrique Cadícamo

(Orq) Juan Carlos Cobián

10. La espuela (M) Elsa Pigran Di Gudini

(Orq) Juan D'Arienzo

大澤さんは知る人ぞ知るスペイン語の先生ですが、いま機関誌Tangolandiaの編集長をお願いしています。その忙しい編集活動の合間に、ライフワークのタンゴ歌詞の邦訳をすすめていらっしゃいます。大澤さんの邦訳は、原語の雰囲気できるだけ生かした今までに無いユニークなもので、是非多くの曲を完成させていただきたいと願っております。

今日のプログラムは、ワルツとミロンガのみという珍しいものになりました。全ての曲がCDで入手可能ということで、そのコレクションの豊富さには驚かされました。

第2部

ヌエバ エスクエラ 演奏

飛び入り

平田耕治 (バンドネオン)

鈴木慶子 (バイオリン) ドウオ演奏



なんと今CAMBATANGOを率いて売り出し中の若手バンドネオン奏者、平田耕治君とこれも若手のバイオリン奏者、鈴木慶子さんが顔を出してくれました。早速無理を言って飛び入りで演奏をお願いしたところ、快く引き受けてくれて素晴らしい演奏を聴かせてくれました。数曲終わったあと、アンコールに応じて演奏してくれた「蘇州夜曲」の素晴らしかったこと。涙を禁じえませんでした。

CAMBATANGOは11月まで全国演奏ツアーをする予定だそうです。

第60回 2011年9月27日

出席者54名

リンコンもこのところ毎回50名以上のお客様が参加してくださって、満員状態が定着しています。この会はタンゴがお好きな方ならどなたでもウエルカム、ダンスも含めて幅広くタンゴを楽しもうという主旨が広がりつつあるような気がして、心強いかぎりです。今日は第2部に変更があり、お客様には申し訳ないことでしたが、何より札幌から岩垂司さんをゲストにお迎えしたことは素晴らしいことでした。せっかく来て頂けるなら是非何かお話しをとお願ひしたところ、こころよく解説を引き受けてくださいました。

第1部

コメンテーター：齋藤富士郎

テーマ：「今宵はO.T.V.をじっくり聴こう」



1. 忘却 (Olvido) A.D'Agostino
2. 独身熟女 (Solterona) A.D'Agostino-J.F.Pollero
3. 沼地の花 (Flor de fango) A.Gentile-P.Contursi
4. 殴打 (Chuzazos) H.Scaparone
5. 北風 (Viento norte) J.C.Suncho
6. (隠しても) 君の姿に出ているよ* (C.T.V.) A.Bardi *「タンゴ名曲事典」による
7. タンゴ・ミロンゲロ (Tango milonguero) F.Scorticati

齋藤さんには急遽ピンチヒッター解説者をお願いしました。古いところから現代物まで、タンゴに対する情熱と知識には頭が下がります。このところずっと機関誌TANGUEANDO EN JAPÓNの編集長として活躍されていますが、最近の内容の充実ぶりは齋藤さんの努力の賜物でしょう。

今日のプログラムはコテコテのティピカ ビクトル。タンゴの原点のようなところで、古いものを好きな方にとっては、懐かしく楽しい30分だったことでしょう。

第2部

コメンテーター：岩垂 司 (札幌)

テーマ：「ラウル・ハウレナとパブロ・アスラン」



1. La puñalada (ナイフで一突き) MONTEVIDEO MUSIC GROUP 4150-2, 2008
Raúl Jaurena (Bn) Julio Frade (Pf) Pablo Aslan (Cb)
2. Ayer (昨日) SOUNDBRUSH RECORD SR-1917, 2008
Raúl Jaurena canta:Marga Mitchel
3. El amanecer (夜明け) ZONO 201003, 2010
Pablo Aslan (Cb) Néstor Marconi (Bn) Nicolás Ledesma (Pf) Ramilo Gallo (Vn)

岩垂さんは北海道のみならず、全国のタンゴファンの間でよく知られた存在の方で、タンゴ研究の第一人者です。タンゴアカデミーの解説などもお願いしています。今日のお話は3曲でしたが、さすが岩垂さんといったところで、多岐にわたってタンゴを聴き込んでいらっしゃるのがあらためて良く分かりました。特にダリエンソ研究では私も教えていただ

くことが多々あります。

第3部

コメンテーター： **西川薫**

テーマ：「昭和タンゴを偲んで」



1. 「La viruta」 Vicente Greco 小澤 泰とオルケスタ・ティピカ・コリエンテス
2. 「A Orlando Goñi」 Alfredo Gobbi オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ
3. 「El choclo」 Ángel Villoldo キンテート・ピリンチョ
4. 「Ojos negros」 Vicente Greco 平野洋輔とロス・ミロンゲーロス六重奏団
5. 「Cualquier cosa」 J.M.Velich-H.V.Rossano 京谷明とオルケスタ・ティピカ大阪
6. 「En la noche」 A.A.Imperiale-R.Cuel 河内敏昭とグアルディア・ビエハ
7. 「ダリエンソに捧ぐ」 島 昭彦 西塔辰之助とオルケスタ・ティピカ・パンパ

西川さんもよく知られた古いタンゴファンですが、今日のプログラムは特にこちらからお願いして、日本のタンゴ楽団特集を聴かせていただきました。西川さんは単にレコードだけでなく資料の収集整理も完璧で、余人の真似出来るところではありません。このへんは一冊の本にまとめて出版して頂きたいと思うくらいです。

最近では聴く機会の少なくなってしまった日本のタンゴ楽団ですが、当時の日本のタンゴ楽団の実力もたいしたものだったのだなあ、としみじみ感じたことでした。

第4部

バンドネオン ソロ演奏：**仁詩**



1. Recuerdos de Bohemia
 2. Milonga de mis Amores
 3. Un fueye de Bandoneón
- アンコール曲 Alfonsina y el mar

仁詩君は最近めきめき腕を上げているバンドネオン奏者。演奏活動も活発で、韓国からも出演依頼があるそうです。韓国でタンゴが日本のように盛んかどうか私には分かりませんが、同じような文化を持つ国ですから好きな人が沢山いても何の不思議はありません。もしかしたら若い人たちに受け入れられているのかもしれませんがね。ぜひ頑張ってもらいたいものです。

嬉しい石像を発見！！

山本 雅生（神戸市）

最近、この様な石像を発見しましたので見て下さい。

過日、神戸市垂水区役所の3階に有る「垂水勤労市民センター」の「レバンテ・ホール」で「和太鼓フェスティバル」が有り、孫が「桴桴」と云うデュオで出演をするので、見に来て欲しいと云うものですので出掛けたのですが、玄関ホールを入った処で小さな石像が置かれているのに気が付きました、何と！その石像はバンドネオンを弾いているでは有りませんか！！タンゴファンの端くれとしては見過ごす事の出来ない逸品なのでした。



その作品は「吉本 豊」さんと云う彫刻家の方が1991年9月に行われた「第6回神戸具象彫刻大賞展」で出された模型入選作品「響き」と云う作品だったのです。インターネットで調べて見ましたら、「吉本 豊」さんは全国的に沢山の作品を設置しておられて「響き」と云う題名の作品も沢山有る様ですが、弦楽器とか管楽器のものが多く様です。その中であってバンドネオンは4作品有る様でして、設置されていて見に行ける物はもう一つ有り、大阪府高槻市城北郵便局前の歩道に有る物で、ベンチになっていて、数名の人が休憩出来



る様になっています。場所は阪急高槻市駅で下車をして、東口から大阪方面に約300メートルで左折旧市街保存地区を171号線の方に約100メートル城北郵便局前の歩道上に有ります（高槻市城北町1丁目8）。（郵便局とは無関係）タンゴファンの方で有れば一度は参拝？をされれば靈験はあらたかなのでは無いか？と思います。（一層タンゴが好きになる！！）事請け合いです。

他の2体（1989年・1990年）はインターネットの「吉本豊作品集」で見える事が出来ませんが、何処に設置されているのかは不明です。吉本さんの作業場は、大阪府豊能郡豊能町切畑採石場と云う処ですが、未だ訪問は果たしておりません。

El sueño del pibe (サッカー少年の夢)

(L) Reinaldo Yiso (M) Juan Puey

貧しい家の戸を叩く
 郵便配達人の大きな声
 胸弾ませて駆け出した男の子
 思わず白い子犬を踏んづけた
 母さん! 母さん! と叫ぶ声
 不思議に思って洗濯場を出た母親に
 泣き笑いしながら告げる男の子
 クラブ (*1) から知らせて来たよ 今日面接だ!

ねえ 母さん 僕 お金稼ぐよ
 バルトネド (*2) みたいになるよ
 マルチノ (*3) やボジェー (*4) みたいになるよ
 西アルヘンティーノ (*5) の連中が言うよ
 僕がああのペルナベ (*6) より沢山シュートを出すって
 サッカー場で僕のゴールに皆が拍手する
 母さんがそれを見る なんて素晴らしいんだろう
 僕は勝つんだ
 下のクラスで始めるけどすぐに一軍で蹴るんだ
 認められるのは分かってるんだ

その夜眠りについた男の子は
 この上なく素晴らしい夢を見た
 満員のスタジアム 華やかな日曜日
 とうとう一軍でプレーしている
 試合は零対零で 残り時間は1分
 ボールを取った 落ち着いて動く
 ドリブルで皆をかわした
 相手キーパーに立ち向かう
 強いキック 勝った

- (*1) 入団したいサッカーのクラブ
 (*2,3,4) その頃のサッカーの有名選手の名前でしょう
 (*5) クラブの名前
 (*6) これも有名選手の名前

Todotango で聴けます。

http://www.todotango.com/Spanish/las_obras/Grabacion.aspx?id=633&player=wmp
 CD はRMG74321,41296-2 (E.Campos 唄) EMI7243 5 41703 2 (R.Chanel 唄) (杉山滋一氏による)

日本タンゴ・アカデミーの行事予定

- 第75回タンゴ・セミナー 日時：11月6日（日）13：30
会場：東医健保会館（JR信濃町駅下車5分）
テーマ：SPで聴く……タンゴ史を飾ったF.カナロの軌跡
（島崎長次郎）
- 関西リンコン・デ・タンゴ 日時：11月6日（日）12：00
場所：神戸三宮「サロン・ど・あいら」
- 東京リンコン・デ・タンゴ 日時：11月15日（火）18：30
会場：TEA&CAFÉ「原宿クリスティ」
- 第76回タンゴ・セミナー 日時：12月11日（日）13：30
会場：東医健保会館（JR信濃町駅下車5分）

編集後記

高橋忠雄氏の没後30年を機に特集を組みました。今号でもまた折角ご出稿頂きながら次号に掲載とさせて頂いた方々や、頂戴した写真・資料の一部しか活用できなかった方々にお詫びを申し上げます。Tanguendo en Japón 次号の締め切りは2011年11月末日です。Tangolandia次号は2012年3月末日を締め切りとします。今までご出稿のなかった方々・しばらく間隔が開いている方々のご出稿を期待しております。（大澤）

日本タンゴ・アカデミー副機関誌

「Tangolandia」(非売品) 第23号 2011年10月 発行

発行：日本タンゴ・アカデミー
〒156-0044 東京都世田谷区赤堤2-32-14-104 (飯塚方)
電話&FAX 03-3324-1989 E-mail iizuka@kve.biglobe.ne.jp

編集部：大澤 寛 (編集長) 〒162-0051
東京都新宿区西早稲田2-1-23-609
TEL&FAX 03-3208-2247
E-mail hdomingo@bc4.so-net.ne.jp

島崎 長次郎・齋藤 富士郎・弓田 綾子
表紙デザイン：脇田 富水彦